新渡戸稲造の「広報外交」観の形成とその意義

上 品　和 馬

はじめに

新渡戸稲造（1862～1933）は、明治・大正・昭和期に、農学者、教育者、技師、行政官、国際行政官、英文ジャーナリスト、社会教育家として活躍した自由主義者・国際主義者として知られている。そのような彼の多様な活動のなかで、本稿においては、「広報外交」に焦点を当てる[1]。

はじめに、新渡戸の活動の一部を「広報外交」と捉える理由について説明しておきたい。まず、一般的に、「外交」とは、A 国と B 国の双方の国家元首や外交官が相互に行う、条約・協定の締結などの政治的・経済的な交渉を指す。

それに対して、「広報外交」とは、A 国の国家元首・外交官・政府に近い立場にいる者が、B 国の国民（一般大衆）に対して、①講演・著書出版・記者会見などによる対外発信、②各界の要人との個人交流、③国際援助・国際協力、④万国博覧会などの国際イベントなどの活動によって、B 国の世論に影響を与え、A 国が B 国の国民から好感を得ることで、A 国の政策をより円滑に進めようとする活動のことである。換言すれば、A 国と B 国の上層部同士が直接やりとりするのが、「外交」であり、他方、A 国の上層部が B 国の一般大衆（国民）に働きかけることで、外交を行いやすくするのが「広報外交」である。

なお、A 国と B 国双方の一般大衆や民間団体が相互にやりとりする場合は、「国際交流」と呼ぶ。以上を、図示したものが図 1 である。

「広報外交」という用語が広く用いられるようになったのは、第 2 次世界大戦後であり、それも近年のことである。したがって、新渡戸が活躍した時代には「広報外交」という言葉はなく、本人

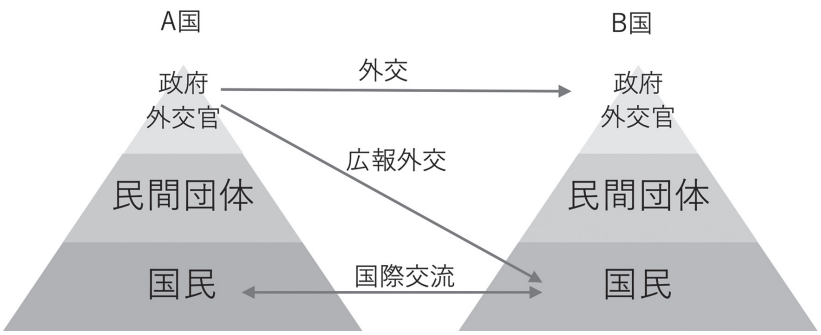


図 1　外交・広報外交・国際交流の相違

も使用していない。「広報外交」は、第 2 次世界大戦前は、「宣伝」や「プロパガンダ」と呼ばれた[2]。

本稿においては、現代からみて「広報外交」に該当する新渡戸の活動を「広報外交」と呼ぶこととする。その理由は、①新渡戸自身が「宣伝」や「プロパガンダ」という当時の言葉を虚偽性が含まれる場合と含まれない場合の両方で使用していることから、その混乱を避けるため、②彼自身は虚偽性に非常に否定的であり、自身の活動においてその排除に努めたため、③彼の活動が一方向性・一面性の強い「宣伝」や「プロパガンダ」の発想を超えていることから、それらの言葉を用いるよりも「広報外交」を用いるほうが適切であると考えるからである。

上述のとおり、「広報外交」は、基本的にはある国の政府や政府要人が、他国の国民を対象とする活動である。したがって、その国家の政府の立場から遊離した立場を取る対外発信等の活動を「広報外交」とは呼ばない。近年、広報外交のアクターを民間団体にまで広げた解釈がなされている場合があるが、その場合でも、その国家の政府の立場から離れた活動を「広報外交」とは捉えがたい。その場合は、「国際交流」の範疇に分類されると考えられる。以下に述べる新渡戸の活動も、日本政府の立場から遊離したものではなく、日本政府の立場に寄り添いつつリードし、善導するという性質の活動であった。

新渡戸は、1883（明治 16）年 9 月に、22 歳で東京大学に入学した際に、担当教諭の外山正一（1848～1900）に将来何をするのかと問われ、「太平洋の橋になり度と思ひます（中略）日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度のです」[3] と答えている。彼がその希望をはじめて実現させたのが、巷間に名高い、英文著書『武士道：日本人の魂』（Bushido：The Soul of Japan）（以下、『武士道』と表記）の出版（1900 年）である。『武士道』は、1900 年にアメリカで出版され、数年内にドイツ語、ポーランド語、フランス語、ノルウェー語、ハンガリー語、ロシア語、イタリア語に翻訳され、最終的には世界的ベストセラーとなった[4]。『武士道』は、日本人が欧米人に劣らず道徳観・倫理観を有しており、日本が列国に劣らぬ一等国であることを世界に知らしめた、新渡戸の代表的著書となり、当時の日本の代表的な対外発信、つまり広報外交となった。

そこで、本稿においては、英文著書『武士道』の出版を、新渡戸の広報外交の最初の達成と捉え、その達成に至るまでの時期、つまり彼の広報外交の能力の「形成期」を分析する。すなわち、本稿では、新渡戸の言辞や行動を検討することによって、新渡戸が、①どのような時代背景の下に、どのような遺伝的素質を持って生まれ、②どのような教育過程を経ながら、どのように広報外交の能力を形成していったのか、そしてその結果、『武士道』を出版するに至ったのか、また、③新渡戸の「広報外交」観の基底にあるものは何か、④新渡戸はどのような「広報外交」観を有していたのか、さらに、⑤彼の「広報外交」観には、どのような現代的意義があるのかを明らかにしたい。

1. 生いたちと幼少期の教育

新渡戸稲造は、1862（文久 2）年に陸奥国岩手郡盛岡城下（現在の岩手県盛岡市）の上級武士の旧家の三男として生まれた。時代は、江戸から明治に移り変わる、まさにその転換期であった。

まず、新渡戸が祖先から受け継いだ素質についてみるために、曽祖父、祖父、父の略歴を辿りたい。

曽祖父・新渡戸維民（1769～1845）は、儒学者・兵法家・武道家として南部藩に仕えた人物であった。維民は、花巻城の防御に関して、意見状を上疏したことが城主の忌諱に触れ、陸奥国田名郡川内に移され、一家は困窮することとなった[5]。

祖父・新渡戸傳（1793～1871）は、家計を支えるために、行商人となった。後に、維民に対する藩主の誤解がとけたことで、傳は商売を辞めて、南部盛岡藩の藩士となる。前歴の経済的手腕が認められて、藩の勘定奉行となり、盛岡藩内の数十村の開拓を担当して成功した。また、前職で材木を扱っていた際に、十和田三本木原の原野の開拓を念願するようになり、その念願が藩士となってから叶って、三本木原の新田開発に着手した[6]。

父・新渡戸十次郎（1820～1868）は、傳の教育方針により、11 歳にして商家へ丁稚奉公に出された。彼は、19 歳で勉学のために江戸へ上り、22 歳の時に南部藩公中奥御小姓となり、藩公のお供をして盛岡と江戸を度々行き来するようになり、翌年、江戸詰勘定奉行に取り立てられた。文武両道に優れ、藩公兵学のお相手役もつとめた。十次郎は、藩財政を立て直すために領内の絹を税として物納させ、フランスと直接交易をして、その収入の一部を三本木開拓事業の費用に当てようとした。しかし、これが誤解を招き、藩公に讒言されて謹慎の身となった。間もなく誤解はとけたものの、失意のために病を得て、1867 年に 48 歳で逝去した。この時、稲造は満 4 歳であった[7]。

以上のように、①曽祖父の「学者」「兵法家」としての能力、②祖父の「商人」「開拓者」としての能力、③父の「藩の外務官」としての能力は三者三様であり、かつ重なり合う部分もあるようである。それらの祖先の能力は遺伝しないものの、そのような能力を育む素質として新渡戸稲造が受け継いでいたことは、上述の彼の活動の多様さから理解できよう。

次に、新渡戸が幼少期に影響を受けたこと、すなわち、教育、家庭環境、時代の潮流を俯瞰する。彼が幼少期に影響を受けたことの 1 つめは、「武士道」の教育である。新渡戸が生まれた 1862（文久 2）年は、明治維新の 6 年前であり、江戸時代の慣習にならって、彼が 5 歳の時には「武士の一員となる儀式が行われた。（中略）刀が初めて授けられた。」[8] のである。5 歳からわずか 6 年間ながら、彼は武士の子としての教育を受けた。帯刀した新渡戸にとって、「臆病な行為と卑劣は、刀を辱めることであ」[9] り、そのような武士としての自覚を植えつけられた。

新渡戸が「武士道とはどんなものかといへば、要素はたくさんあらうが、要するに、その根本は恥を知る、廉恥を重んずるといふことではないかと思ふ。」[10]、その「廉恥心は正義を重んずる念より起るのである。」[11] と述べているように、彼にとって、「廉恥心（恥の感覚）」と「正義を重んじる精神」は、武士道の基本であった。彼が、「自分の行為が道徳上より見て恥ずべきことなく、善悪上より見て敢て不善を為さぬ限りは、敢えて恥とするに足らぬ。」[12] と述べているとおり、廉恥心と正義を重んじる精神は、新渡戸にとって表裏をなす精神的な根幹となった。

幼少期に芽生えたこの「正義」の感覚は、後年、キリスト教の思想を学んだことで、次第により高い思想へと昇華されていった。彼がいう「正義」は、形而下の道徳的・倫理的に善か悪かという次元にとどまることなく、人間の世界を超越した「天」に対して真実か虚偽か、誠実か不誠実かという、形而上の次元で捉えるべきものとなり、より高度化されていったのである。

「天」に対して真実か虚偽か、誠実か不誠実かという点について、新渡戸は、「信 veracity すなわち誠 sincerity がなければ、礼は茶番や見世物になってしまう。（中略）嘘やごまかしは、ともに卑怯とみなされた。武士は、みずからの社会的地位の高さゆえ、商人や農民よりも高い水準の信（誠

実さ）を要求されると考えた。『武士の一言』（中略）は、その言葉が真実であることの十分な保証であった。武士の言葉には重みがあり、その約束は一般に証文なしに結ばれ、かつ履行された。（中略）信は、このように重んじられた」[13] と述べている。「真実を重視する」「虚偽は卑怯である」というこの考え方は、新渡戸が実施した「広報外交」観の基底をなしている。

新渡戸は、帯刀の儀式を受けて、武士としての教育を受けたものの、しかしその 6 年後には廃刀令が出された。武士の心得として受けていた訓練、すなわち剣術・槍・柔術は、正規の訓練ではなくなってしまったのである。彼は、「高貴な者の義務を象徴する刀を放棄したとき、私はしばらくの間、高い台座から落ちてしまったような感じがした。そして、これからは何にも縛られずに気ままにできる、すくなくともあまり良心の咎めや恥にさいなまれずにおられる、と思ったものである。道徳観が無感覚になる危機状態にあった。」[14] と、幼少期にそのような思想的な空白感・虚無感を味わったことを述懐している。この経験は、6 年間に叩き込まれた武士道の精神が、彼の内奥に深く染み込んでいたことを意味している。

新渡戸が幼少期に影響を受けたことの 2 つめは、西洋文化である。1864 年に、長州藩の攘夷決行への報復措置として、英米仏蘭の 4 ヵ国艦隊による下関砲撃事件が起こった。この事件に直接関与した血気盛んな人々は「急激かつ徹底的に四欧軍の優越性を悟らざるを得なかった」[15] し、また、この事件を傍観していた人々も「深く明白に、西欧強国の抗い難き侵入を知った」[16] という。この事件当時、新渡戸は 2 歳であったが、「私の意識の芽生える時期は、これに関する話でもちきりであった。」[17] というほど、新渡戸は、四国艦隊下関砲撃事件を、日本が西洋文化の優越性を思い知らされた衝撃的な事件として捉えている。それが新渡戸の「育った時代の精神的風潮」[18] であったのである。

新渡戸の家庭環境における西洋文化の影響については、幼い新渡戸の家庭環境には、父が東京から持ち帰った、マッチ、オルゴール、ナイフ、フォークなどの西洋の輸入品があふれており、彼は幼少期より西洋文化に触れ得る環境で育った。

また、新渡戸の生活環境には、電気製品もあった。彼は、「ある日かかりつけの医者が、『オランダ』から取り寄せた簡単な電気器具を持って来た時の、あの誇らしげで熱心な様子が思い出される。私たちはその器具の柄を持たされて、ビリッと来たのには全く驚いた。（中略）その医者は、西洋科学の優れていることを語り聞かせて私たちを啓発した。」[19] と述べているとおり、西洋科学の素晴らしさに、幼少期に気づかされたのである。

さらに、新渡戸に西洋の優位性を感じさせたものは、西洋の生活用品や電気製品だけではなかった。「その頃の私の人生に西洋の偉大さを確信させる証拠がもう二つ現れた。ひとつは普通の鉛筆で、もうひとつは牛肉である。」[20] と述べている。そもそも新渡戸が生まれ育った地方では、馬や牛は食用のために飼育されておらず、馬や牛の肉を食することは賤むべき冒涜として考えられていた [21]。しかし、新渡戸一家は、西洋文化の影響を享受して牛鍋を食するようになり、そのことを新渡戸は、「家族の知的および道徳的進歩の転換期を印した」[22] と捉えた。

このように、新渡戸は幼少期に、西洋の軍事力や西洋文化の優位性に触れて驚かされ、それらを享受した。しかしその一方で、彼は西洋に負けたくないというサムライ魂、つまり対抗心も抱いた。彼が、東京大学の入学時に述べた「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度のです」[23] という言葉から明らかなように、日本の思想や文化を、西洋のそれらと同等の価値があるものとして捉えていたからこそ、思想や文化を相互交換することが成り立つのであり、広

報外交を実施することができたといえよう。

新渡戸が幼少期に、西洋文化が雪崩れ込んでくる時代の潮流を読み取って、西洋から積極的に学び、西洋とコミュニケーションを図ろうとした行動の１つが、英語の学習であった。幼少期の新渡戸は、盛岡でかかりつけの医者から英語のレッスンを受ける機会を得た[24]。東京から取り寄せた英語のテキストを開く時、「どの一つを取って見ても、英語の単語は耳新しく、未知の世界の生活や活動が目前に広々と開けてきた。兄も私も、国語よりも英語にすっかり魅せられてしまった。」[25]というほど、英語の学習は新渡戸の将来を照らすものであった。しかし、新渡戸家に出入りしていた医者の英語の知識はさほど高いレベルではなかったことから、新渡戸は東京へ出て、本格的に英語を学びたいという思いを募らせるようになった[26]。

新渡戸は、幼少の頃から、英語の学習に熱意を示したが、それに比べて、国語や中国古典の学習にはそれほど意欲的ではなかった。新渡戸の幼少期の教育は、まだ寺子屋で大学や論語などの四書・五経を学ぶという江戸時代の教育であった[27]。新渡戸が「国語の勉強では、孔子の論語や孟子を、この哲人達が若人の心に何を伝えようとしたか、いささかも理解せずに、ただ大声で朗読した。」[28]と述べているとおり、国語や中国古典の学習には、ほとんど意欲が湧かなかったようである。

後年、東京に出てからも、新渡戸は、「私は国語の本を読んでも、いささかの感動も覚えたことがなかった。」[29]、「始めて私が東京に来たのは明治四年で、その頃日本の学問は、殆んど頽れつてしまつた時分である。論語や孟子も、読むものは少なかつた。まして我が国語などは、顧みるものも稀であつた。神道が政府の保護の下に活躍し、奨励されてをつたにも拘らず、国語といふものは、甚だしく振はなかつた。（中略）それほど英語の流行つた時代である。」[30]と、自分自身としても時代潮流としても、国語教育が低調であったと述べている。新渡戸に関する限り、彼自身が国語学習に興味を示さなかったと同時に、彼の幼少期は国家による国語教育の創生期であり、政府による正規の国語教育が間に合わなかったのである。その結果、新渡戸の国語の素養は、深いものにはならなかった可能性が高い。

以上に、新渡戸が幼少期に受けた教育や影響について述べたが、それを「広報外交」の観点から検討すると、次の諸点が導きだされる。

(1) 新渡戸は、幼少期から、西洋文化に対して脅威と同時に対抗心を抱いていた。

(2) 新渡戸は、西洋を受容し、それに追随していくのではなく、西洋と対等に渡り合いたいという気持ちを持っていた。

(3) 新渡戸は、西洋と対等に付き合うためには、相手を知って、相手とやりとりする必要があることを幼少期に察知し、子供の頃から英語の学習に励んだ。

(4) 新渡戸は、幼少期に、廉恥心（恥の感覚）と正義を重んじる「武士道」の精神を培った。新渡戸は、後年、広報外交を実施する際には、「事実に基づいた真実を伝える」ことを重視した。その考えの基底には、廉恥心や正義を重んじる「武士道」の精神が存在していた。

(5) 新渡戸は、幼少期より英語の学習には熱心であったが、他方、国語教育の学習には熱意を示さなかった。その結果、国語の素養は充分ではないものとなった可能性がある。

2. 東京の英語学校時代

新渡戸は、父・十次郎の死後、将来の出世のためには、新渡戸を東京で学ばせるのが最善策であるという母親の考えによって、亡夫の末弟で、東京在住の太田時敏（1838～1915）の養子となり、1871（明治 4）年の満 9 歳の時に上京した。新渡戸が最初に学んだ学校は、築地にある外国人が経営する私立の英語学校であった。当時の教育制度についてみると、1872（明治 5）年 8 月に文部省が学制を発布し、同年 9 月に「小学教則」を発布したが、この時、まだ現在の「国語」科に相当する教科は独立して設けられていなかった。新渡戸はこの学制に間に合わなかったのである。

そこで、新渡戸は、英語学校で学ぶだけではなく、同時に国語力を補うべく国語の私塾にも通った。しかし、彼は、「国語の本を読んでも、いささかの感動も覚えたことがな」[31] く、国語の学習には身が入らなかった。その結果、新渡戸は、「国語の先生の家に行く途中に大きなガタガタな小屋があり、（中略）みな席を取って、演壇で喋る講釈師に耳を傾けているが、（中略）私は常連になってしまった。（中略）そこで聞く話は、いつも偉人の物語、気高い行為の物語、いつけない悲しみの物語などである。（中略）私はいつも話を終わりまで聞き、高潔な行いや情深い犠牲の物語に、心を高められた思いで小屋を出たものであった。」[32] と述べているとおり、国語の学習をさぼって、しばしば講談を聴きに行った。「講釈師の話は（中略）、国語の勉強を犠牲にして得られた。」[33] のである。

また、9 歳の新渡戸にとって、「当時の私の精神的教示のすべての源泉は、時おり聞く叔父（太田時敏）の話、母からたびたび来る書簡、神主の説教、講釈師の物語等であった。」[34] という。そのようなものが国語として、新渡戸に精神的な教示を与えたのである。

この当時に講談・落語・神主や寺院の説教にたびたび接する機会を得たことは、新渡戸が、「私は話好きで、議論好きで、弁論部においてもまた個人的座談においても、相手をやり込めるのがうまかった。」[35] と述べているように、口頭による発信、すなわち講演力の習得に非常に役に立ったと考えられる [36]。そのような口頭発信の能力が、やがて広報外交の大きな力になっていったことはいうまでもない。

新渡戸は、築地にある英語学校で 1 年間学んだ後、1872 年に元南部藩主の経営する共憤義塾に入学し、そこで約 3 年間学んだ。この塾で使用される教科書は、すべて英語であった。

当時 10 代の新渡戸は、西洋に対してどのように考えていたのであろうか。彼が、「西洋人は征服に力を傾け、仏陀の国を奪い取り、孔子の同国人を阿片で毒し、全く道徳観念に欠けていると、私たちは昔から繰り返し聞かされて来た。もちろんそのような行為は、倫理学を生み出す妨げにはならないに違いないし、科学にかけては、西洋人の知性はすばらしものだ。」[37] と述べているように、西洋の劣っている面と優れている面の両方を切り分けて把握していた。西洋に対しては批判と尊敬の両方の念を持って、英語を学習していたのである。

1875 年に、新渡戸は満 13 歳で、官立の東京外国語学校に合格した。上京後の新渡戸にとって、3 つめの英語学校であった。ここは大半の教師がイギリス人とアメリカ人であり、当時の日本最高レベルの授業を受けることができる学校であった。本校は、数年後には英語部だけ切り離されて独立して帝国大学予備門になり、さらに第一高等学校になった。ここでの「教科書はおおむね英語で

あったが、私にとって善くも悪くも、唯一の知恵の木であった。」[38] と述べているように、彼は単に語学の習得だけでなく、思想的にも吸収した。

東京外国語学校では寄宿舎生活であったが、そこで新渡戸は喧嘩など何かと問題を起こしたようである。そこで、養父の太田は、少し年長の佐藤昌介（1856～1939）に新渡戸の面倒をみてくれるように頼み込んだ。佐藤の父と新渡戸の養父・太田とは同藩であり、ともに江戸詰の仲であった。その結果、佐藤も新渡戸も寄宿舎生活をやめて、九段にある下宿に移り、新渡戸は佐藤の監督下で同居することになった。この佐藤は、後に新渡戸の将来を切り拓いてくれる貴重な先輩となるのである。

この時期、新渡戸は、イギリスの哲学者のフランシス・ベーコン（Francis Bacon：1561～1626）、イギリスの劇作家のウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare：1564～1616）、イギリスの詩人のジョン・ミルトン（John Milton：1608～1674）、イギリスの小説家・詩人のオリヴァー・ゴールドスミス（Oliver Goldsmith：1730～1774）などの英文著書を好んで読んだ。彼は、「言語的表現の美に関する限りでは、中国の古典が卓越した美しさをもってわれわれの心を打つが、英文学が与える思想は、内容を飾る華麗な文体よりも遥かに重要なものである。」[39] と述べているように、特に英文学の持つ思想性に魅了されていた。

日本では、キリスト教は1873年に解禁となったが、新渡戸が東京外国語学校在籍中に、アメリカ人英語教師のM・M・スコット[40]から勧められて書いた作文「日本にキリスト教を伝える重要性」が、1876年のフィラデルフィアでの「独立百年記念博覧会」の記念文集に掲載された。さらに、この作文は、後日、『ニューヨーク・イブニング・ポスト』というメジャーな新聞に転載された。13、4歳にして、新渡戸は執筆による対外発信の第一歩をなし得たのである。この時、新渡戸はすでに東京外国語学校を終えて、札幌農学校で学んでいたが、英語教師・スコットは、東京外国語学校の後輩たちに新渡戸の作文を披露し、後輩たちは新渡戸の作文の新聞掲載を共に喜んでくれた[41]。新渡戸はその様子を知らされた時に、達成感を得て、「最高の励みを覚えた。」[42] という。この成功体験が、これ以降の新渡戸の対外発信の活動を後押しすることになる。新渡戸は、自分で書いたものが出版物の形で発信されることに大いに喜びを覚え、これを繰り返すようになるのである。

東京の英語学校で学んでいた頃の新渡戸の葛藤について述べておきたい。彼が東京で学んでいた13、14歳の頃に、新渡戸の母親が、折々手紙で、「お前の御祖父様は偉いお人で、お父上もそうであった。お前がすぐれた人にならぬなら、みなの笑い物になり、あれは母の子で父上の子ではないと笑われます。もしおまえが不名誉なことでもすれば、母も不面目です。立派な人におなりなさい。」[43] と圧力をかけてきた。そこで、新渡戸は、「偉くなる唯一の職業といえば、政治にかかわるものであり、私は社会的出世に最も見込みのあるその職業に、当然心を引かれていた。日本は法律を改正して国内を整えようとしていた。それゆえ、法律は私の専門であるべきであった。」[44] と考え、法学を学ぼうとした。しかし、この望みは新渡戸の内奥から湧き起こった欲求ではなく、母親からの圧力や世間的な観点から生じた欲求であった。新渡戸が将来について悩んでいた頃に、政治への野心から、彼を覚醒させる2つの出来事が起こった。

1つめは、東京外国語学校のある職員から「科学、つまり化学、物理、天文学等の自然科学の研究が日本で最も欠けていること、西洋の卓越性はこの方面にあること、この点で日本が遅れている限り、いかに日本の法律と政治をもってしても日本は西洋に勝ることはできない」[45] と聞かされた

ことである。このように聞かされた新渡戸は、「単に国に貢献すると言う理由で、自分に生まれつき向いていないことを専門にして良いだろうか。不適当な選択は言うまでもなくその人のためにも、家族のためにもならない。私は物理科学も自然科学も好んだことがない。どういう学問が自分に合っているだろうか。」[46] とさらに悩みを深めた。

2 つめの出来事は、明治天皇が東北巡幸の際に、新渡戸の亡き祖父が残した家に宿泊し、新渡戸の一族が行ってきた開拓事業や貧窮者救済への貢献に対して、満足の意を示したことである。新渡戸は、明治天皇の行幸と新渡戸家に対して言葉を賜ったことに感動した。そして、彼は、「私は次第に開拓者の仕事が家族の伝統であると考えるようになり、私も家族のためにその伝統を負う義務があり、さらになお重要なことは、天皇のために、微力なりともこの義務を果たすことだと考え」[47] て、開拓事業が自分のなすべき使命だと考えるようになった。

しかし、新渡戸が開拓事業を目指すには、大きな問題があった。彼が、「開拓事業には、工学知識が不可欠で、数学の完全な知識を必要とすることがわかった。これには全く意気阻喪した。私の算術や代数との性の合わなさは、限りない。私はこの二つの学問を最悪の敵として嫌っていた。」[48] と述べるとおり、開拓事業を担うに必要な工学のための基礎である算術や代数が、新渡戸は大の苦手であった。そこで、彼は、「私は開拓事業に着くために、工学を避けて通る道はないものかと捜した。祖父が家の事業に着手した主な動機は、貧しい人々を苦しみから救うことにあったと、私は常に理解していた。（中略）数字に愛されることを乞わずとも、なにか私を開拓と結び付けてくれる科学があるはずだ。」[49] と、実家の開拓事業に自分を結びつけるものが何なのかを模索するようになった。

以上の東京の 3 つの英語学校時代に受けた教育や影響を、「広報外交」の観点から検討すると、次の諸点が導きだされる。

(1) 新渡戸はこの時期に、『ニューヨーク・イブニング・ポスト』に掲載されるほどの英作文が書けるようになり、また、後日入学する札幌農学校での英語の授業がすべて理解できるほどに、英語力を向上させた。

(2) 新渡戸は、国語の学習については、目で読み書きする国語よりも、自ら好んで講談を聴くことのほうが多かった。このことは、彼の口頭による発信力につながっているように思われる。

(3) 新渡戸は、どのような形であれ、自己の能力を開拓・開発に結びつけることで、国家の役に立ちたいと強く願うようになった。この希望は、後年の台湾における糖業事業への協力や、満洲政策への支持などにつながっていったと考えられる。

3. 札幌農学校時代

1876 年に、札幌農学校が開校した。この学校は、農学校という名にもかかわらず、「農夫をおくり出すことを目標としていなかった。その目的は若者を国家の行政機関の任務につけるよう訓練することにあった」[50] ことから、新渡戸は、「私の目指す新しい大望に、まさにぴったり合っていた。」[51] と考え、入学を決意した。また、数字に弱い新渡戸にとっては好都合なことに、札幌農学校は、「数理的の適合性は入学の主要条件ではなかった。」[52] のである。新渡戸は、東京英語学校を中退して、

開拓事業について学ぶために、1877（明治 10）年 9 月（満 15 歳）に、札幌農学校に第 2 期生として入学した[53]。第 1 期生には、以前同居していた先輩の佐藤昌介がいた。

札幌農学校は、学校の農場で働く実習は比較的少なく、農業技術を教える学校というよりも、より広範囲な分野の教育を目指していた。自然科学や応用科学に重点が置かれてはいたが、人文系の学科もおろそかにはされていなかった[54]。その学科とは、具体的には、数学、土木工学、植物学、化学、農学、動物学、英作文、演説法、倫理、哲学史、歴史概論、農業史などであった[55]。

新渡戸は 3 つの英語学校で学んでいたおかげで、すべて英語でなされた札幌農学校の授業は、苦労もなく理解することができた。新渡戸は学内で、「英語の太田（新渡戸）、数学の内村」と言われるほど、英語が得意であったが、数学は同級生の内村鑑三（1861～1930）には敵わなかった[56]。

札幌農学校においては、教師と学生間も、学生同士の間も毎日英語で会話し、旧友との文通も英語に限られていた[57]。さらに、新渡戸は、札幌農学校入学後に、級友たち（内村鑑三、宮部金吾（1860～1951）、岩崎行親（1857～1928））と一緒に 4 名で、立行社を結成した。この会では、英語の練習のために、会話はすべて英語を用いることとし、誤って日本語を用いた場合は、罰金を課すという徹底ぶりであった。徹底的に英語力を向上させることで、身を立てようというねらいがあった[58]。

また、同校には、初代教頭のウィリアム・S・クラーク（William S Clark：1826～1886）の提案によって創設された「開識社（かいしきしゃ）」という学生による会があった。この会は、日本語と英語の双方の話し方や作文の能力を向上させることをその目的としていた。学生がテーマを設定し、賛成派と反対派に分かれて論じ合う、いわゆるディベートも行った。この会において新渡戸は、考えの深め方、表現の仕方、説得の仕方などを学んだ[59]。

新渡戸の信仰面についてみると、札幌農学校 2 期生 22 名のうち、新渡戸、内村鑑三、宮部金吾、広井勇（1862～1928）、高木玉太郎、藤田九三郎、足立元太郎の 7 人がキリスト教に入信し、1878（明治 11）年の 6 月に洗礼を受けた。この 7 人に、すでに受洗していた佐久間信恭（1861～1923）を加えて、新渡戸らは小さなクリスチャン・グループを作った。このグループは、独自の祈祷会を開くなど、熱心なキリスト教徒として生活を共にしながら、札幌農学校在学中に関わりを深めた[60]。この全 8 名のクリスチャン・グループは、学業成績において上位を占めるようになった。英作文の成績の上位者は、それを英語で講演することが課せられ、英語講演を行うことで賞金がもらえた[61]。

母と養父である叔父とから、「偉くなれ、決して人に負けてはならない」と励ましを受け続けたことは、新渡戸にとって、クラスにおいて常によい成績を取らなければならないという精神的な圧力になった[62]。その結果、精神的に繊細な性格の新渡戸は、名誉や価値を追求する立身出世という世俗的な願望と、キリスト教の道徳的価値観との間に矛盾を感じるようになり、それをどうすれば解消できるのか悩みはじめた。この矛盾を解消して、世に認められたいという欲求を正当化したかったのである。この葛藤を解決するために、彼は長時間図書館にこもった。自分の悩みの解決方法が、哲学書や宗教書に示されているのではないかと考え、多くの書物を読みあさった。新渡戸は、東京の学生時代には「active（行動派）」というあだ名がつけられていたのに、読書に没頭するうちに、野球などの運動をすることから次第に離れて、友人たちから「monk（修道僧）」と皮肉られるようになるほど内向的な人間になってしまった[63]。新渡戸は、視力が衰え、それによる耐えがたい頭痛に悩まされ、鬱傾向になるまで悪化した[64]。新渡戸を間近で見ていた内村鑑三が、新渡戸の気質について、「何事をも吟味し、且証明しなければ信じることが出来なかった。」[65] と述べている

ように、彼は物事を正確に突き詰めて考える傾向が強かったのである。

新渡戸は、目の治療を受けるために、1881 年 7 月に北海道を発ち、上京した。上京の際に、以前より気になっていた書籍をやっと入手することができた。それは、イギリスの評論家・歴史家のトーマス・カーライル（Thomas Carlyle：1795〜1881）の『サーター・リサータス（以下、邦題の『衣装哲学』と呼ぶ)』であった[66]。

眼病からくる頭痛に悩まされて、治療のために上京した後に、療養のために郷里へ帰った新渡戸は、そこで母の急逝を知った。この頃、新渡戸は信仰に懐疑的になっていて、教会からも遠ざかっていたが、神に直接的に求める祈りは続けていた。眼病による頭痛と鬱傾向、母の急逝、信仰への懐疑という不運続きの中で、新渡戸は、自分自身と境遇が似ているカーライルの体験を重ね合わせながら、カーライルの『衣装哲学』を貪るように読むことよって救われ、神の声を聴き、心が呼び覚まされる神秘的な体験を得て、感動した。この体験を神の摂理として受け入れたことで、自信をもって、独りだけで神と交わる方向の信仰へ傾斜していった[67]。独りで神に向き合うというこの信仰の形が、のちのクエーカー派との出会いにつながっていった。

1881 年 7 月に、19 歳で新渡戸は札幌農学校を卒業し、開拓使御用掛（官職）として民事局勧業課に出仕した。就職後も暇さえあれば読書し、特に『衣装哲学』を耽読した[68]。カーライルからは、机上で考えるだけでなく、実際に行動する、つまり実践することの重要性を学んだ。

しかし、こうした多読のために再び目が衰えたため、1881 年 12 月末から 1882 年 1 月にかけて、新渡戸は東京で目の治療に専念した。1882 年 3 月には農商務省御用掛を命じられ、同年 4 月には病状が快方へ向かったので、再び札幌での勤務に復帰した。1882 年 7 月には、生振地方へ主張したり、同年秋には、札幌農学校予科の教鞭をとったりもした[69]。1883 年には、新渡戸の健康状態が回復した。新渡戸は、自分は学究的であり、実地農業に従事することに向いていないのではないかと迷っていた。15、6 歳の頃は、祖先の意志を継ぐことが唯一の親孝行であり、国家への奉仕の道であると考えていたが、21 歳となった現在は、時勢も急進的に変化し、事情が異なっていることから、農業を統治することだけが国家に益する道ではないと思うようになっていた[70]。幸いなことに、札幌農学校の官費生の卒業後の義務年限が 5 年から 3 年に改められたので、1883 年に新渡戸は農商務省に退官を願い出て、受理された。新渡戸は、「役人となるには不向きなのと、自分でもぜひ東京へ上り、その上海外に留学し、も少し深く勉強したい念慮が熾んであって、どうしても役人になると云う気になれなかった。（中略）間もなく、開拓使が廃されて、義務奉職の規定が緩くなった。僕はさまざまに運動して、いよいよ東京に出ることになった。（中略）僕は『大学の文学部に入り、経済学と英文学を研究したい。（中略)』といって、いよいよ大学に入ることになった。」[71]と当時を振り返っている。

以上に検討した幼少期から札幌農学校時代までの期間の、新渡戸の教育的基幹を表したものが、【図 2】である。

札幌農学校時代に受けた教育や影響を、「広報外交」の観点から検討すると、次の諸点が導きだされる。

（1）新渡戸は、札幌農学校時代には、教師と学生間の会話も、学生同士間の会話も英語だけで行った。英語で作文し、英語で講演する機会を多く得た。

（2）新渡戸は、数学、土木工学、植物学、農学、動物学、英作文、演説法、倫理、哲学史、歴史

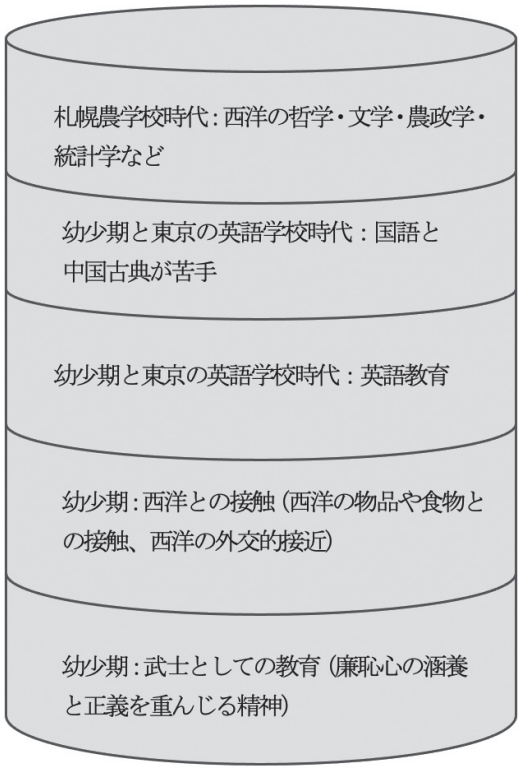


図２　新渡戸の教育的基幹（幼少期～札幌農学校時代）

概論、農業史などの科目を、すべて英語で学んだ。

(3) 新渡戸は、自主的に英文学の読書経験を多く積んだ。以上のように、英語で様々なことを学んだことは、後年の英語講演や英文著書執筆に大いに活かされることになる。

(4) 新渡戸は、カーライルに心酔し、彼の思想から、机上で「考えて論じる」だけでなく、実際に「実行する」ことの重要性を学んだ。これが広報外交の活動へとつながっていった。

(5) 新渡戸は、実際のキリスト教会における信仰に対しては迷いがあったものの、キリスト教そのものについては書物から多くのことを学んだ。そして、独りだけで神と交わる信仰へと傾斜していった。これが後に、クエーカーとの出会いにつながり、集会において多くの講演の機会を得ることになるのである。

4. 東京大学、アメリカ留学時代

新渡戸は、1883（明治 16）年 9 月、21 歳の時に東京大学に入学し、東京大学文学部選科生となった。彼は、札幌農学校時代に、自分の適性が数字を扱うことが必要な自然科学や応用科学よりも、人文科学にあることに気づいた。その結果、東京大学では農業経済学を専門分野として学ぶことで、新渡戸家の伝統である開拓者としての使命を引き継ごうと考えた。ここでは、農業経済学のほかに、社会学、欧州発展史、英文学、租税学、統計学、英作文、英語、歴史などを履修した[72]。

東京大学入学の際の面接で、新渡戸は、文学部教授・外山正一（1848～1900）から、「東京大学で何を学ぶつもりか」と問われ、「農政学をやり度と思ひますが左様云ふ学問は未だ無い相ですから、

責ては其参考共なるべき、経済、統計、政治学をやり度と思ます、詰りは農政学を以て私の専門とし度のですけれ共、実は私に一つの道楽がございまして、下手の横好で今迄も時さへあれば見て居ますが、英文学も序でに大学で習ひ度と思ひます。」[73] と答えた。さらに、外山に「英文を学んで何をするのか」と問われたのに対して、新渡戸は、「太平洋の橋になり度と思ひます（中略）日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度のです」[74] と返答した。

しかし、当時の東京大学は歴史も浅く、後年ほどの威信はまだなかった。教授陣は、数名の御雇い外国人と、海外留学から帰国したばかりの若い日本人講師からなっていた。入学後のある日、新渡戸は、外山から今読んでいる本について問われた。新渡戸が答えると、外山からその本は日本にまだ来ていないので、その本について学芸雑誌に紹介するように頼まれた。新渡戸は、その本は 8 年前に出版された本であり、自分がすでに入手している本が、「日本の唯一の大学に未だ来て居らんとは、少なく共日本の学界は八年は遅れている」[75] と東京大学のレベルの低さに失望した。新渡戸は、東京大学に入学したものの、大学の授業に物足りなさを感じ、1 年生の 2 学期の終わりには早々に中退を決意し、翌 1884 年 8 月に東京大学を退学した [76]。在学期間はほぼ 1 年間であった。この頃の新渡戸の英語力は、「二十代の頃には、英語の本を読む方が、日本の本を読むより遥にやさしいくらゐであった。」[77] というレベルに達していたのである。

1884 年 9 月、新渡戸は満 22 歳の時に私費で渡米し、それから約 3 年間アメリカに滞在することになった。新渡戸のアメリカ留学の動機は、①世に出て何かをなそうという若者にとって、留学するのは当たり前という当時の風潮があったため [78]、②東京大学の授業が遅れていると感じたため [79]、③新渡戸自身が子供の頃から留学願望を抱いていたため [80]、④新渡戸が自分自身をもっと磨きたいという強い意志を持っていたため [81]、⑤養父・太田時敏が明治維新の際の家禄奉還によって得た公債を換金して、それを渡米費用のために提供してくれたため [82]、⑥幼少期からの友人であり、東京外国語学校時代は同じ宿舎に住んだことがあり、札幌農学校の先輩でもある佐藤昌介が先に渡米していたため [83]、以上の諸理由が挙げられる。

新渡戸は、「いよいよ希望が成って横浜より米国行きの船に乗り込んだ時は、天国に行くような心地した。」[84] というほど、渡米に胸を膨らませた。

1884（明治 17）年 9 月に、アメリカのサンフランシスコに到着し、そこからは汽車で東部を目指す約 1 週間の大陸横断の旅となった。1 週間もの長旅なので、乗客たちはお互いに顔見知りになり、気軽に会話も交わすようになった。ある日、車中に居合わせた数名の客に、新渡戸が、哲学者・スペンサーの話をし始めたところ、「彼等五人許り居たのが段々殖えて二十人余も、グルット取巻いて、静粛に、僕の熟れもしない破れ英語の説明をきいて、暫く時を過した。」[85] という盛況ぶりになった。新渡戸の話に聴き入っていた乗客たちに、感想を求めると、彼らがいうには、一般大衆は日々の仕事に忙しく、霊魂や未来について考えたり学んだりする機会がないので、「此様な話は面白いもんで、折さえあれば、耳に入れて損はない」[86] と歓迎された。この時、新渡戸は満 22 歳であった。彼は初めての渡米直後に、すでにアメリカ一般大衆を魅了するだけの講演能力を有していたのである。

新渡戸は、当初、ミードビルという街にあるアレゲニー大学に入学し、ドイツ語、哲学、論文の修辞法を学びはじめた。しかし、アレゲニー大学に在籍したのは、10 日間余りであった [87]。先にジョンズ・ホプキンス大学で学んでいた先輩の佐藤昌介から誘いを受けて、新渡戸は、ボルチモアにあるジョンズ・ホプキンス大学に転校し、佐藤と同居することにしたのである。

ジョンズ・ホプキンス大学では、経済学、歴史学、政治学、行政、国際法、財政学、史的批判、英文学、ドイツの制度などの学科を履修し、通算約３年間在籍した[88]。この３年間に、新渡戸は、「その全生涯を支配するほどの貴重なる修養を得られた」[89]という。上述の修得科目をみると、数字を中心的に用いる苦手な学科は避けているようである。

新渡戸は、初年度は、農地問題に焦点を絞って研究した。しかし、２年目の冬に、歴史・政治学科のハーバート・B・アダムス（Herbert B. Adams）教授の勧めによって、思い切って論文のテーマを「日米関係」に変更し、論文を提出した。新渡戸は、農学をやるという当初の目標を捨て、歴史学で博士号を取ることにしたのである[90]。

新渡戸は、ジョンズ・ホプキンス大学在籍中に、次第に学資が不足し始めた。それを気の毒に思って、学資援助を申し出てくれたアメリカ人がいた。しかし、新渡戸は、金銭的援助を申し出てくれたアメリカ人に対して、「外国人から金を受けることを潔しとせず、申し出を断然辞退し」[91]、日本人として、武士としての意地を通した。

一足先に大学院を卒業し、帰国した佐藤は、新渡戸の窮状を察し、新渡戸家の親類で留学経験もある菊池武夫（1854～1912）に事情を話し、学資の一部を援助してもらった。菊池は、東京大学教授兼司法官の地位にあり、後に中央大学を創設した人物である。しかし、菊池からの送金は、十分ではなかった[92]。

この時に、新渡戸の窮状を見かねたアダムス教授が、学資の助けになるようにと、新渡戸にアルバイトを与えてくれた。それは大学の新聞部で、英文雑誌の編集やアメリカ歴史学会の論文集の索引を作成したり、大学の外で講演したりする仕事であった[93]。このアルバイトは、新渡戸にとっては、アメリカの社会の動向を知ることができ、英語の勉強にもなり、実際に講演の経験も積め、学費の足しにもなるという、願ってもない仕事であった。珍しい日本という国についての話を聴きたいという講演の依頼が、方々の諸団体から寄せられた[94]。新渡戸は働きながら、苦学を続けた[95]。こうして、彼はアメリカの一般大衆の前で講演するという現場での経験を徐々に積んでいったのである。

ところで、新渡戸は、札幌農学校時代に、すでに聖書を読んでキリスト教に引きつけられ、キリスト教徒となって、実際に多くのキリスト教会に行ってみたが、違和感を感じて、他の信者と交際することがなかった。その結果、新渡戸のそのような態度を異端視する他の信者がいたし、新渡戸と同宿することを拒否する信者さえいた[96]。新渡戸は、「何事をも吟味し、且証明しなければ信じることが出来なかった。」[97]ことから、新渡戸なりにキリスト教について納得がいくまで真剣に考え詰めていたからこそ、キリスト教会のあり方などを受け入れられずに悩んでいたのである。渡米後も、新渡戸の中で、キリスト教のあり方に対する違和感はまだ解消されていなかった。新渡戸は、渡米後にキリスト教各派のいくつかの教会を訪問してみたが、教会が立派な建物であり過ぎたり、数百数千の人々が集まって礼拝をしていたりするなどの点で、新渡戸の腑に落ちなかった[98]。新渡戸は、「私があまり共感を覚えないのは、キリストの教えをあいまいにする教会のやり方、およびさまざまな儀礼や形式であって、教えそのものではない。」[99]と述べているとおり、キリスト教そのものについては理解を示していた。

そのような折、新渡戸は、ボルチモアでクエーカーの集会に数回出てみて、はじめて自分がイメージしていた理想的な宗教の姿に巡り合ったと感じた。新渡戸が求めていた宗教のあり方に、クエ

ーカーのやり方が合致したのである。新渡戸がクエーカーに好感を抱いた点は、①何事もどうするかを決める場合に、多数決で決めずに、意見を述べる人の人物（人格）の軽重で決めること、②俸給で雇って、牧師を定めていないこと、③洗礼を施さないこと、④集会は黙坐瞑想を主として、各人が直接的に神霊に交わることで礼拝としていること、などであった[100]。こうして、1886（明治18）年 12 月に、新渡戸は正式にクエーカーの一員となった[101]。

新渡戸は、次第にクエーカーの人々と親しくなり、新渡戸の英語力・講演力を認める人々から、講演の機会が与えられるようになった。新渡戸は、講演の中で、1858（安政 5）年に日本がアメリカをはじめ各国と締結した修好通商条約、すなわち不平等条約の改正について訴えた[102]。当時の日本が悩まされていた、治外法権を認め、関税自主権を持たない、この不平等条約の改正は、日本の国をあげての重要なテーマであった。

また、新渡戸は、イギリスの著名な法律家がクエーカーの集会で行った講演を口述筆記して、宗教雑誌に投稿した。その紹介記事が好評を得て、諸雑誌に転載された。それがきっかけとなって、新渡戸は多くのクエーカー関係者に知られるようになり、「屢々（しばしば）演説を依頼せられ」[103]るようになり、ボルチモア、フィラデルフィア、ニューヨークなどの各都市で講演するようになった[104]。講演会の規模は、少人数の集会から、聴衆約 800 人の大規模の集会まであった[105]。新渡戸は、講演時には「多くは日本服着用」[106]を希望された。1887 年 5 月に、新渡戸はアメリカを去ることになるが、その前の 3 ヵ月の間には、フィラデルフィアの各地で、不平等条約の改正を訴える講演を 30 回も実施した[107]。

新渡戸の講演内容については、①日本におけるキリスト教の布教状況[108]、②日本の文化や慣習[109]、③日米修好通商条約（不平等条約）の改正をめぐる日米間の問題[110]、④アメリカの懲治監（少年院）に留置されている若年者を対象とした、道徳に関する話[111]などが挙げられる。したがって、この時期の新渡戸による発信内容は、広報外交の観点からみると、①文化外交、②政策広報、③普遍的・教育的な内容の 3 つであったといえる。

新渡戸は、各都市のクエーカー集会のための講演活動で得た謝礼金を、学資に当てることができた[112]。

クエーカーの人々は、集会で何かことを決める場合に、多数決で決めずに、意見を述べる人物の人格の軽重で決めた。その人間の人格を重視したのである。クエーカーの人々が年齢や国籍に関係なく、新渡戸に講演を依頼した事実は、新渡戸の人格や講演力が認められていたからに他ならない。

1886（明治 19）年 12 月に、新渡戸がフィラデルフィアにおいて講演「日本の事情」[113]を実施した際に、メアリー・パタソン・エルキントン（Mary Patterson Elkinton：1857～1938）を紹介され、それ以降、2 人の間で文通が続いた[114]。メアリーは、後に新渡戸の妻となる女性である。

1886（明治 19）年夏に、佐藤昌介はジョンズ・ホプキンス大学を卒業して帰国し、札幌農学校教授幹事・校長事務代理に就任した。佐藤は、札幌農学校の発展のために優秀な教授を集める必要を痛感し、当時の北海道長官に、新渡戸と他 1 名のドイツ留学を承認させた[115]。1887（明治 20）年 3 月に、札幌の佐藤から、「君を札幌農学校助教に任じ満三箇年間農政学研究の為め独逸国留学を命ず」[116]という辞令が新渡戸に送られてきた。ドイツ留学に際して、新渡戸には、ドイツで農業経済を学び、3 年後に帰国して、札幌農学校で教職に従事することが唯一の条件として課せられていた[117]。願ってもないドイツ留学の機会であった。新渡戸は、佐藤によって札幌農学校の助教授

に任命され、ドイツ留学を命じられるという恩恵を被ったのである。

新渡戸は、1887年5月にニューヨークを出帆し、アイルランド、イギリス、オランダを経て、ドイツへ向かった[118]。

以上のアメリカ留学時代の経験や影響を、「広報外交」の観点から検討すると、次の諸点が導きだされる。

(1) 新渡戸は、ジョンズ・ホプキンス大学のアダムス教授から新聞部のアルバイトを得て、英文雑誌の編集と講演の実地経験を積んだ。

(2) 新渡戸は、クエーカーのグループから講演依頼を受けるようになり、次第にキリスト教関係の諸集会だけでなく、少年院や一般の諸団体からの講演依頼も多く受けるようになった。

(3) 新渡戸は、フィラデルフィアをはじめ各地で、不平等条約の改正を訴える講演を30回も実施した。

(4) この時期の新渡戸による発信内容は、①文化外交、②政策広報、③国の枠組みを超えた普遍的な内容の3つがあった。

(5) 新渡戸は、ジョンズ･ホプキンス大学において、経済学、農政学、農業経済、行政、国際法、歴史学、英文学など、多様な学問を修得し、発信のための知識を吸収した。

5. ドイツ留学時代

1887年6月に、新渡戸はドイツのボンに到着した。彼は、ボン大学で2学期間（14ヵ月間）だけ学び、1888年8月にはベルリン大学に移り、その後ベルリン大学で約1年間学んだ[119]。さらに、1889（明治22）年4月にはハレ大学へ移り、約1年間学んだ[120]。新渡戸が3つのそれぞれの大学において、どのような科目を学んだのか、また、広報外交からみた場合にどのような経験を得たのかをみていきたい。

はじめに、ボン大学では、農政、農業経済、財政学、応用経済といった学科を履修した[121]。新渡戸が、日本の外国貿易についてドイツ語で書いた学術論文は、雑誌『エキスポート』に掲載された[122]。

新渡戸は、ボン滞在中にベルギーの法学・経済学者のエミール・ド・ラブレー教授（Émile Louis Victor de Laveleye：1822～1892）の著述を読んで感銘を受け、ラブレー教授に直接手紙を書いて面談を乞うたところ、ラブレー教授より招待を受け、教授宅に1週間宿泊させてもらう機会を得た[123]。その際に、新渡戸はラブレー教授から、「日本の学校では宗教教々育は何を授けるか」[124]と問われた。新渡戸が「宗教などは教へませぬ、仏教も神道も学校内では教へませぬ（中略）何も倫理科はございません」[125]と答えたところ、ラブレー教授は、「そんなら学校ぢや倫理的の思想はどうして教へる…どうして善悪の区別を覚えるだらう…」[126]と問い返してきた。ラブレー教授とこのようなやりとりがあった後に、新渡戸は自分なりに日本人の道徳観について考えるようになった。その結果、新渡戸は、「国民に一種の道徳心があることに気が付いた、一種特別な道念であつて、最も侍の中に行はれたから武士道と名を付けて見た、即ち其は書物に習はず、謂はゞ以心伝心で今日までも伝わつた遺伝的道徳の一大系統である。」[127]という自分なりの答えをみつけた。

新渡戸は、日本人の道徳心についてラブレー教授と質疑応答をした体験に加えて、メアリー・エルキントンからも、折々、「なぜ日本ではこれこれの考え方や習慣が一般的なのですか」という質問を受けていた。それらの体験が契機となって、それらの問いに答える形で、約 10 年後に『武士道』を執筆することになる。

次に転校したベルリン大学では、農業史、統計学、財政学、社会主義に関する講義、農業史といった学科を履修した[128]。最後に移ったハレ大学では、農業経済学、統計学の講義を受講し、1890 年 6 月に論文「日本土地制度論」（ドイツ語）を提出し、文学修士と哲学博士を取得した[129]。

新渡戸のアメリカ留学に続くドイツ留学は、1887 年 5 月から 1891 年 1 月までの約 3 年半であった[130]。新渡戸は、「僕は独逸に留学の頃、学生或は教授と一緒に遠足に行き、若くは招待された場合にも、一つ日本人の演説をと請求がある時には、決して得意でもなし、自信もなきに、短いことなれば独逸語でも綴つたけれ共、少し長いことは英語或は場合に依つては日本語でやつた」[131] と述べているとおり、英語ほど完璧にはできなかったが、ドイツでも折々講演を行う機会を得たようである。ボン大学に留学していた頃、史学会において講演を求められた際には、英語とドイツ語と日本語の混合で講演した[132]。

新渡戸は、1889（明治 22）年に長兄・七郎が逝去したために、新渡戸姓に復帰して、実家を相続することになった[133]。彼は、留学時代の最後の仕事として、ドイツ東部とカナダの植民政策を調査するために両地を訪問した後に、1890（明治 23）年 6 月に約 3 年ぶりでアメリカに戻り、ジョンズ・ホプキンス大学から名誉文学士を授与された[134]。これは事前に、大学側に授与を懇請していたものであった。新渡戸は、名誉文学士を授与されたことから、アダムス教授の援助に対する礼状を送ったところ、アダムス教授から「大学に提出した論文に訂正を加えて、出版するように」との返信が来た。そこで、新渡戸は、1890 年の秋に原稿を書き直して、アダムス教授に送った。アダムス教授は、その原稿を『ジョンズ・ホプキンス大学歴史学政治学研究叢書』に別巻として加えてくれて、さらにその出版経費として 440 ドルを貸してくれた[135]。新渡戸は札幌に戻った後に数年かけて 440 ドルを返済した[136]。新渡戸は、英文著書という形で発信することに非常に大きな意義を感じていたため、たとえ借金をしてでも自費出版したいという気持ちが強かったのである。

1891（明治 24）年 1 月に、『日米関係史』（The Intercourse Between the United States and Japan：An Historical Sketch）という書名で、ジョンズ・ホプキンス大学出版部より出版された[137]。『日米関係史』は、3 年後の『ザ・サタデー・レヴュー』（The Saturday Review）（1904 年 10 月 15 日付）に好意的な書評が掲載されていることから、継続的に読まれていたものと思われる[138]。

1891（明治 24）年 1 月に、新渡戸はフィラデルフィアのフレンド集会堂で、メアリーと結婚式を挙げた後に、2 人でアメリカを発ち、同年 2 月に横浜に到着した[139]。東京に約 2 週間滞在した後、東京を発って、3 月に札幌に着いた。到着時には、盛大な出迎えがあった[140]。

以上のドイツ留学時代の経験や影響を、「広報外交」の観点から検討すると、次の諸点が導きだされる。

（1）新渡戸が、日本の貿易についてドイツ語で執筆した学術論文が、雑誌『エキスポート』に掲載された[141]。

（2）新渡戸は、ラブレー教授に自ら手紙を書いて、個人交流を図った。

（3）新渡戸は、ラブレー教授から日本人の道徳教育について問われ、『武士道』執筆の契機とな

る示唆を受けた。

(4) 新渡戸は、英文著書『日米関係史』を出版した。これは、英文著書によるはじめての対外発信となった。

(5) 新渡戸は、ドイツ留学中に折々ドイツ語で講演する機会を得たが、アメリカでの講演ほど回数は多くはなかった。口頭表現は、英語のほうが堪能であったようである。

(6) 新渡戸は、ドイツ留学時代に幾度も下宿を替えたが、そのような生活の中で、様々な一般大衆との個人交流を体験した[142]。

6. 札幌時代・療養期

1891（明治 24）年 3 月、新渡戸は札幌農学校教授に任ぜられて、農政学、農史、農学総論、植民論、経済学、英文学、ドイツ語、倫理学、農業経済などの指導を担当することになった[143]。

また、1891（明治 24）年 9 月には、北海道庁技師を兼任して、植民地選定事業に関与した。北海道庁に属する札幌農学校の植民学担当なので、必然的な任務である。北海道各地を訪問して、開拓を指導する業務であった。北海道庁技師は、1893（明治 26）年には本務となった[144]。

また、新渡戸は、1892（明治 25）年には、私立中学校「北鳴学校」の校長に就任した[145]。

さらに、1894（明治 27）年 1 月には、社会事業として貧民児童のための「遠友夜学校」を設立するなど、多忙な日々を送った[146]。

1892（明治 25）年 1 月には、長男・遠益が誕生したが、すぐに夭折した。メアリー夫人の産後の肥立ちが悪かったので、新渡戸が同伴してメアリー夫人をアメリカへ里帰りさせたが、彼女はすぐに日本に戻ってきた。この頃から、新渡戸は次第に神経衰弱の傾向が強くなっていった。

この時期、新渡戸は多くの著書を出版した。このうち、対外発信としては、1893（明治 26）年に書かれた、アメリカ・シカゴ万博において札幌農学校を紹介する英文『日本の札幌農学校』（The Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan）が挙げられる。

また、この時期に、新渡戸が出版した著書のうち、以下の著書は、クエーカーの活動を日本に紹介する著書である。1893（明治 26）年には、札幌農業学校で同じクリスチャン・グループだった藤田九三郎の夭折を悼んで、『藤田九三郎伝』（日本語）を上梓した。同年には、クエーカーの開祖の『ジョージ・フォックス伝』（日本語）も刊行した[147]。1894（明治 27）年 12 月には、ウィリアム・ペン（William Penn：1644〜1718）の生涯と彼の宗教上の事業を描いた『ウィリアム・ペン伝』（翻訳書・日本語）を自費出版した[148]。1895（明治 28）年には、同書を翻案した、笠井修との共著『建国美談』（日本語）を出版した。この 2 冊については、新渡戸がアメリカを去る前にクエーカーの著述家のトーマス・コープに会い、フォックスとウィリアム・ペンについての著書を日本語に翻訳する同意を得ていた[149]。

新渡戸は、数々の業務が重なり、多忙を極めたことから、脳神経衰弱症に陥ってしまった。その結果、1897（明治 30）年 10 月に、医師の勧めとメアリー夫人の英断により、札幌農学校教授やその他のポストを辞職し、伊香保で療養することにした。

翌 1898（明治 31）年 7 月には、新渡戸は、「薬用は必要ないが、唯気永に静養するの外全癒の見

込なし」[150] と診察されたことから、その後の約 2 年間、メアリー夫人に付き添われて、アメリカのカリフォルニア南部を転地しながら療養することになった。この療養中に、『武士道』が執筆された [151]。

1899（明治 32）年 11 月に、新渡戸は、アメリカで、『武士道』（英文）を出版し、翌 1900（明治 33）年には、日本でも出版した。その後、1904 年から 1905 年にかけては、日本が日露戦争に勝利し、世界の目が日本に向けられたタイミングでもあったことから、『武士道』は、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、ノルウェー語、ハンガリー語、ロシア語、中国語でも出版された [159]。『武士道』が脚光を浴びたことによって、新渡戸の「太平洋の橋になり度と思ひます（中略）日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度のです」[160] という望みは、新渡戸の「広報外交」の第一弾として、達成されたといえる。

幼少期から『武士道』出版までの期間の、新渡戸の「広報外交」能力の形成過程を表したものが、【表 1】である。

表 1　新渡戸の「広報外交」能力の形成過程

	広報外交の 2 つの発信能力	
時期	英語「講演」の能力（研鑽・成果）	英文「著述」の能力（研鑽・成果）
札幌農学校時代 （1877 年～ 1881 年）	○札幌農学校において、英語だけで会話する日常生活を送る。 ○札幌農学校において、優秀賞の作文にもとづいて英語講演する。	○英語日記をつける。 ○友人たちとすべて英語で文通する。 ○東京外国語学校の英語教師の M・M・スコットの推薦により、応募した英作文が、アメリカの新聞『ニューヨーク・イブニング・ポスト』に掲載される。 ○札幌農学校内において英作文が優秀賞に選ばれる。
⬇	⬇	⬇
留学時代 （1884 年～ 1891 年） 札幌農学校教授時代 （1891 年～ 1897 年）	○ジョンズホプキンス大学のアダムス教授から、講演のアルバイトを得て、講演力を磨く。 ○クエーカーの人々と親しくなり、ボルチモア、フィラデルフィア、ニューヨークなどの各都市で講演の機会に恵まれ、講演力を磨く [152]。講演では、主に不平等条約の改正を訴える [153]。 ○クエーカーの宗教雑誌に投稿した記事が諸雑誌に転載されたことが契機となり、多くの教会から講演依頼を受けるようになる [154]。	○クエーカーの集会で感銘を受けた講演の要旨を宗教雑誌に投稿し、掲載されて評判を得、さらに諸雑誌に転載されるほど評判になる [155]。 ○1890（明治 23）年、『日本土地制度論』（独文）出版。 ○1891（明治 24）年、英語論文『日米関係史』出版。 ○1893（明治 26）年、アメリカ・シカゴ万博で、札幌農学校を紹介する英文「The Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan」を書く。 ○1893（明治 26）年、『藤田九三郎伝』（日本語）と『ジョージ・フォックス伝』（日本語）出版 [156]。 ○1894（明治 27）年、『ウィリアム・ペン伝』（翻訳書・日本語）出版 [157]。 ○1895（明治 28）年、『建国美談』（日本語）出版 [158]。
⬇	⬇	⬇
広報外交としての最初の成果	1911（明治 44）年、日米交換教授としてアメリカへ招聘され、166 回校の大学において講演を実施する。	1900（明治 33）年、英文著書『武士道』出版。その後、各国語に翻訳され、世界的なベストセラーとなる。

以上に検討した、「広報外交」の能力の形成期の全体を俯瞰していえることは、次のとおりである。

(1) 新渡戸は、アメリカに留学した時点で、英語力と講演内容ともに、講演する能力を有していた。

(2) その英語講演の能力は、札幌農学校時代の終わり頃までには培われていたと考えられる。

(3) 留学時代に、大学で論文を書き、それを英文著書として出版した。彼は借金をしてでも出版するほど、英文著書を出版することに積極的であった。

(4) 新渡戸は、札幌農学校時代からキリスト教を信奉してはいたが、大半の教会のあり方やその他運営の仕方などの諸点について疑問を抱いていた。しかし、ボルチモアのクエーカーのグループに接し、彼らの会のあり方や運営の仕方などに共感を覚えたことから、自らクエーカーに入信するに至った。そのクエーカーのグループとの関わりの中で、アメリカ東部の各地で講演活動を実施するようになり、さらにクエーカー以外の団体からも講演を依頼されるようになった。

(5) 当時の講演内容としては、①不平等条約の改正、②日本文化、③少年院における更生などの教育的・普遍的な内容が挙げられる。

以上の「広報外交」の能力形成期の総仕上げとして、対外発信としての英文著書『武士道』の出版が位置づけられよう。それは、ラブレー教授やメアリー夫人から投げかけられた質問に答えたいという気持ちが執筆の契機となった。

7. 新渡戸の「広報外交」観の基底

新渡戸の「広報外交」観の基底に存在するものは、幼少期より培われた「武士道」の精神である。彼は、「武士道とはどんなものかといへば、（中略）要するに、その根本は恥を知る、廉恥を重んずるといふことで」[161] あり、その「廉恥心は正義を重んずる念より起る」[162] と述べている。つまり、新渡戸にとって、「武士道」の精神の根幹をなすものは、①廉恥心（恥の感覚）と、②正義を重んじる精神であった。

(1) 廉恥心

まず、「廉恥心（恥の感覚）」について述べる。新渡戸が、1883（明治 16）年 9 月に、21 歳で東京大学に入学した時に、外山教授に対して、「太平洋の橋になり度と思ひます」[163] と将来の抱負を述べたことは先述のとおりであるが、この時点で、後年彼が実施した多様な広報外交、つまり①講演、②著書出版、③新聞・雑誌への寄稿、④新聞記者向け会見、⑤各国専門家との協働、⑥ラジオ講演などの幅広い活動を実施することを想定していたとは考えがたい。しかし、東京大学入学時のこの時点ですでに、「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度のです」[164] と述べていることから、日本が欧米に比肩しうるだけの思想や文化を有していると考えていたことは明らかである。新渡戸は、日本の思想や文化に矜持を持っていた。そのような思想的・文化的に優れた日本が、欧米から劣っていると見下されることは、新渡戸にとって恥ずかしいことであった。つまり「廉恥心」を傷つけられることであったのである。

新渡戸は、明治期の日本が変貌を遂げようとした動機は、欧米諸国から日本が「劣等国と見下さ

れることを容認できない名誉の感覚、――――それこそがもっとも強い動機であった。」[165] と捉えて、その動機の「源泉が武士道である」[166] と述べている。この場合の武士道とは、「廉恥心」である。

また、新渡戸は、アメリカ留学時代に学資に窮していた時に、金銭的援助を申し出てくれたアメリカ人に対して、「外国人から金を受けることを潔しとせず、申し出を断然辞退し」[167] た。つまり、どれほどお金に困っていても、外国人に借りを作ることは恥ずべきことであり、それをよしとせず、対等に渡り合いたいと考えていたのである。

さらに、新渡戸が、「此島国をして欧化ぢゃない世界化する重圧は、海外に遊学したものに一番ある。」[168] と述べているように、自らが太平洋の橋になることによって、日本を「欧化する」のではなく、「国際化する」と明言していることから、西洋と対等に渡り合うという姿勢を持っていたことは明白である。日本にとって従属的に欧化されることは、恥ずべきことなのである。

そのような恥の感覚は、彼が実施した広報外交にも表出されている。たとえば、新渡戸がアメリカ留学時代に、ボルチモアやフィラデルフィアで実施した講演活動において、彼は、幕末に日本が欧米によって強引に締結させられた「不平等条約」の不当さとその改正の必要性を、アメリカの一般大衆に強く訴えかけた。この行動の根底にある動機は、日本が欧米諸国から「劣等国と見下されることを容認できない」[169] という恥の感覚であった。

また、新渡戸の恥の感覚は、彼の広報外交に別の形でも表出されている。それは、虚偽を排除して、「事実に基づいた真理」を伝えるという発想に表れている。国際社会において、虚偽を発信したり、捏造した情報を流したりすることは、非常に恥ずべき行為である、というのが彼の広報外交における基本姿勢であった [170]。つまり、嘘をつくことは、恥さらしの所業なのである。第 1 次世界大戦前後から、各国によって虚偽の宣伝が頻繁に行われるようになった [171]。そのような状況に対して、新渡戸は、たとえ国際社会において、他国の悪意によって日本にとって不利な「偽りの報告が拡がっても、永い目でみると、ついにはそれ自身の目的を破ること」[172] になり、日本が一時的に誤解されたとしても、「ついには事実がいっそう雄弁に語る」[173] ことになり、最終的には、「真理は砕けて土に帰しても、復活する」[174] という結果になると考えた。新渡戸は、虚偽の宣伝は必ず暴露され、虚偽を流した国は、最終的には国際社会で信用されなくなると考えた。嘘をついてまで、自国に有利なように自局を運ぼうとするのは、恥ずべきことだという考えを、新渡戸は強く持っていたのである。

上に、「事実」「真理」という言葉を用いたが、注意しなければならないのは、新渡戸が「事実」を「fact」の意味で、「真理（真実）」を「truth」の意味で、それぞれ使い分けている点である [175]。新渡戸は、広報外交を行う際には、「現に起こった基礎的現実」[176]、すなわち「事実」[177] を重視する。しかし、その事実としての「外面上の出来事」[178] や「個々バラバラの事件」[179] をそのまま用いるのではなく、それらの「一連の出来事」[180] から導き出される「根底に横たわる原因」[181]、すなわち事実から抽出される「真理」[182] や「真実」[183] を明らかにし、それを発信することが重要なのである [184]。つまり、「事実」にもとづいた「真実」を発信するのである。新渡戸の広報外交の根本的な発想は、虚偽報道や捏造報道などの「偽りの宣伝をさけ」[185] て、事実にもとづいた「真実を語る」[186] ことによって、国際社会からの信頼を得るというものである [187]。

さらに、新渡戸は、「事実に基づいた真理」を明らかにする姿勢を、他国に対してだけ求めていたのではなく、日本自身についての不都合な事実や真理さえも、他の国々に明らかにすることで、

かえって国際社会からの信頼が得られると考えていた[188]。

ところで、複数のアクターが「事実に基づいた真理」を主張し合った場合に、それを一般大衆、つまり世論はどのように受け止めればよいのであろうか。この点について、新渡戸は次のように述べている。

> ある政府の下では自由貿易が『経済的真理』であるが、他の政府の下では保護貿易がそれである。政治学や経済学では、北極と南極ほどにもかけ離れたいわゆる真理が存在する。――そしてその真理には、皆それぞれに、正直な主唱者があり、誠実な宣伝家がいるのである。おそらくそれら両極端はともに真理である、南北両極が現実にあるのと同様に。民衆が必要としているのは、中間の真理の提示である――アリストテレスの中庸の公理である[189]。

「事実に基づいた真理」が複数ぶつかり合った場合に、極端を捉えるのではなく、一般大衆は、中間の真理、つまり中道を進む道を選ぶべきだというのが、新渡戸の基本的な考え方である。すなわち、彼は、中庸を重んじる精神を重視した。

(2) 正義の観念

次に、「正義の観念」について述べる。新渡戸が「廉恥心は正義を重んずる念より起る」[190]と述べているとおり、彼の武士道の精神の根幹をなしているもう一方が、「正義を重んじる精神」である。

新渡戸が、「フェアプレーには正義の観念が土台をなしてゐる。正義の観念なしに、フェアプレーは有り得ない。」[191]と述べているように、国際関係においては自国の利益だけを考えるのではなく、正義の観念に基づいて、公平無私な見地から行動しなければならないというのが、彼の基本的な考え方である。具体的には、国際関係において、「フェアプレーといふものは、先方が正しければ此方が譲る、此方が正しければあくまでも頑張る。何もかも譲るのがフェアプレーではない。」[192]というものであるとした。また、他国と対峙する際には、「偏見、にくみ、そねみ、うらみの気分があつてはならない。フェャプレー、ジャスティス、国際心を備へてかゝらなければ、成功するものではない。」[193]という姿勢を重視した。

それでは、新渡戸のいう「正義」とは、どのようなものなのであろうか。彼は、次のように述べている。

> 倫理の領域では風変わりなものなどはない。作法無作法ということは、皮膚の色同様風土の産物であろうが、正邪は気象学（自然科学）の範囲をこえる概念である。社会慣行は、われわれの食べる食物と同じく、地理的境界とともに変異するであろうが、善悪はそんな境界に限られはしない。各国民の歴史的発展は、道徳観念の外に現れた姿には、様々な変容を加えてきたが、その本質において、道徳観念は世界中同一であり、永遠である。現在、これまでになかったくらい、人間活動の高次の領域はどこにあっても、全世界的標準が地域性や民族性に取って代わりつつある。風俗習慣にあたっては、言語と芸術にあっては、また政治や社会形態にあっては、東は東、西は西であっても、道徳法則は羅針盤の指針によって区別はしない、東西いずれの半球にも等しく服従を求める[194]。

この文中で、新渡戸が、「道徳観念は世界中同一であり、永遠である。」[195] と述べているとおり、彼は世界共通の正義、つまり「国際正義」の重要性を主張した。彼は、国際連盟事務次長をつとめていた時期に、世界各国が同じ正義の観念を持っていることを前提とした上で、国際連盟が「人類の将来にとって欠くべからざるもの」[196] となるためには、「世界が結合しているこの点、即ち相共通した普遍的な正義の観念を現わし、これを培って行く」[197] 必要があるとした。

しかし、その一方で、新渡戸は、次のようにも述べている。

> 国家の責任はそれぞれ異なっているのだから、重要な利害関係をまきこむ問題にあっては、諸々の国家は平等ではない（中略）。〝大国〟と〝小国〟の区別が認められるならば、〝大国〟がまきこまれている問題においては、それを研究し判断すべきは、その同等の国々――すなわち〝大国〟――であることが、便宜上求められる。実際、便宜だけなくて、正義もそれを求める。（中略）同等のものを不等扱いすることは、不等のものを同等扱いするのと同じく不正である。人は――そして国も――自分と同等な人によって判断されなければならない。（中略）個人間でも国家間でも、民主主義と平等が着実に進歩してきたが、にもかかわらず、〝大国〟と〝小国〟の心理は、その責任の度が異なっているゆえに同じではないことをつねに覚えておくことは、実際的な政治上の知恵である [198]。

このように、新渡戸は、「道徳観念は世界中同一であり、永遠である。」[199] とする一方で、大国の問題は他の大国が判断するべきであって、大国の問題を小国が判断することは正義ではないと述べている。すなわち、自分の国を自己統治できていない国が、その国の正義観でもって、自己統治できている他国を批判することはできないとしている。つまり、新渡戸のいう国際正義とは、自国で自国を統治できる、同じレベルの国家同士が共通して持っている、あるいは取り決めた道徳観念を指している。自分の国を自己統治できない国家や、治外法権の行われている国家の道徳観念は、普遍的な国際正義とは呼べないというのである。

また、新渡戸は、正義と不正義とが、明確に白黒の区別がつくものかという点については、「道徳観念においては、善と悪との譲合（コンプロマイズ）をば、道念薄弱を証するものなりとして非難するかなれども、この善と悪との間にも、広大なる中立地帯あり」[200] と述べているように、正義と不正義の間には、幅の広いグラデーションがあるとしている。つまり、法律のように明確に割り切れて、結論が出せるものではなく、状況に応じて判断されるべき余地のあるものだということである。

以上に、新渡戸の考えによる「正義」について、彼の言辞をもとに検討した。彼のいう「国際正義」は、状況に応じて幅のあるものであり、曖昧な部分が残されているものなのである。

ところで、新渡戸が国際関係において「正義」や「フェアプレー」について論じる際に、宗教的な内容を持ち込んでいる例を見ないようである。しかし、新渡戸の道徳観念、正義･不正義の観念、善悪についての考え方の根本には、やはり彼が信奉していたクエーカーの考え方が影響していると思われるため、新渡戸の宗教観やクエーカー観について、以下にその主旨を述べておきたい。

キリスト教を代表する西洋の宗教も、仏教・神道・道教などの東洋の宗教も、いずれも「宇宙意識」を有している。それは、「天」や「神」や「造物主」などと呼ばれ、「人間を超えた存在」を意味する。その「宇宙意識」、つまり「人間を超えた存在」を認識すること（これを新渡戸は、「内な

る光」と呼んでいる）から、道徳観念は生じる。その意味において、どの国も道徳観念を有している。しかし、東洋の宗教は、いずれも人格性を重視しない。キリスト教だけが人格性を重視している。人格を認めない限り、完全な道徳観念は生じない。さらに、キリスト教の中でも、クエーカーだけが世界平和を唱えて、厳格に実行している。たとえば、婦人の平等性や奴隷制度の廃止を主張しているのは、クエーカーだけであり、その道徳観念を実行しているといえる[201]。

以上が、新渡戸の宗教観やクエーカー観の一端であるが、「人間を超えた存在」という形而上のものに、形而下のものを照らし合わせることによって、善悪の判断ができるということと、国際連盟という国家を超越した機関によって、各国が普遍的な正義を共有するという発想は、類似しているようにも思われる。

新渡戸の広報外交の基底には、(1) 廉恥心（恥の感覚）と (2) 正義の観念が存在しており、それらが彼の広報外交にも影響を与えていることを以上に明らかにした。

8. 新渡戸の「広報外交」観

新渡戸は、①『武士道』が世界的なベストセラーになり、対外発信、つまり広報外交としての成果を上げて以降も、様々な広報外交を継続的に展開した。たとえば、②日米交換教授としての講演活動、③国際連盟の事務次長としての広報活動、④知的協力委員会の創設・運営、⑤太平洋問題調査会の国際会議（太平洋会議）における意見交換や講演活動、⑥『日本国民：その国土、民衆、生活』(Japanese Nation：its Land, its People and its Life)（1912 年 6 月）や、『日本：その問題と発展の諸局面』(Japan：Some Phases of her Problems and Development)（1931 年 9 月）といった英文著書の出版、⑦満州事変後の対米講演活動などである。そのような活動を行う過程において、新渡戸がどのような「広報外交」観を持っていたのかについて検討したい。具体的には、新渡戸の (1) 情勢認識、(2) 広報外交の必要性の認識、(3) 広報外交のアクター、(4) 広報外交の対象、(5) 広報外交の方法、(6) 広報外交の目的に分けて検討することで、彼の「広報外交」観の全体像を明らかにする。

(1) 情勢認識

まず、新渡戸の情勢認識について触れる。新渡戸は、明治維新以来、日本が国際社会において二等国として扱われている状況を打開したいと考えていた。日本には切腹という野蛮な風習があり、日本人は西洋のような倫理観をもたず、日本には鉄道も十分に整備されておらず、思想面や教育面でも劣った国であると見なされていたことから、二等国として不平等条約を結ばされたのである。日本がそのような扱いを受けているのは、政治･社会･文化などの様々な面において、「吾人（日本）の英米に及ばざるやなお遠し。」[202] という理由からであり、日本が自らを変えていく必要がある、というのが彼の基本的な情勢認識である[203]。

国際社会を見渡した時に、新渡戸は、国際社会の趨勢は、「外交のビズネスは政府でやる。しかし大体の仕向け方は輿論がこれを指導して行く。といふことに、どこの国でもなりつゝある」[204] と捉え、「今日のごとく民衆の力が大をなす時代に当たり、世論を無視することは到底永続できぬ」[205] という情勢であることに気づいた。また、彼は、「世論は必ずしも、彼ら（その国の政府要人）に

何を為すべきかを示すとは限らないにしても、何をしてはならないかについては、かなり秀れた警告を与える」[206] と考えたのである。

(2) 広報外交の必要性の認識

そこで、新渡戸は、「われわれ自身の国について正確な情報を海外に伝え、外国の人たちにわが国民の本当の感情を知らせるというような、必要欠くことのできぬ任務をしないでおいて良いものか。」[207] と考え、日本の苦境やそれを克服するための日本の政策に対する理解を求めるために、欧米各国へ「こっちから出向いて行って諒解させねばならぬ」[208] と考えた。新渡戸が述べている行動はまさに広報外交であり、その実施の必要性を認識していたのである。

(3) 広報外交のアクター

広報外交のアクター（広報外交を実施する主体）については、新渡戸が、「どこの国でも所謂デモクラテック・コントロール・オブ・ディプロマシイなど、或は民間外交などといふ言葉が行はれて、（中略）人民がもつと外交に口のきけるやう」[209] になりつつあり、「政治家や軍隊ばかりの任務ではないと思ふ。国民銘々が其の積りにならねばならぬ」[210] と述べているように、彼は、民間人も主体的に外交に関与していかねばならないと考えた。その結果、新渡戸は、一民間人として、広報外交を実施するアクターとして外交に関わっていったのである。

新渡戸は、民間外交の必要性を非常に重視していた。彼が、「デモクラシィは、専門家の政治ではない。国民一般の政治である。故に専門家ばかりで事を論ずると、とかく一般に考への亙らぬことがある。（中略）政治は専門で出来るものではない。高いところから、あるいは横から岡目八目で、ポリチィカル・スピリットをもつてやらなければ、内治外交共に進歩の途はないものである。」[211] と述べているように、政治の専門家だけが政治を行うと、一般大衆のことに考えが及ばないので、政治は様々な角度から、つまり民間人も政治に関与すべきであると考えたのである。

(4) 広報外交の対象

広報外交の対象としては、当時、隆盛の途にあった「独り米国に限らず、各国の了解と同情を得る必要を最も切に感ずる」[212] とし、国際社会全体を視野に入れる必要があると考えた。しかし、とりわけ「米国は甚だ著しい速度を以て勃興し、独り従来の如く実業に於てのみ然るにあらずして、文芸思想に対しても尚旭日の勢がある。」[213] ことから、アメリカを最重視した。

さらに、新渡戸は、アメリカに日本を理解してもらうだけでなく、「米国及米国人に対する正しき解釈と了解とを怠れば、我国そのものの未来を危ふする」[214] ことから、日本もアメリカについての理解を深めておく必要があると考えた。つまり、日米間相互の理解が必要であると考えたのである。

(5) 広報外交の方法

新渡戸が実施した広報外交の第１の方法は、「発信」である。新渡戸は、「達者な舌（発信力）は、最も強壮な腕（武力）よりも、強力である」[215] と述べているように、講演をはじめとする対外発信の効果を、軍事力よりも１ランク上位に位置づけ、国際関係における１つの強いパワーであると捉えていた。その具体的な方法については、「人間の腕（武力）は二、三フィートの範囲内しか働くことはできない。それにひきかえ、この新聞とラジオの時代にあっては、声（発信）のとどかぬ所などあるだろうか」[216]、「この放送とテレビ時代にあっては、世界は、舞台よりむしろ聴衆となりつつある。」[217] として、新聞、ラジオ、テレビといったメディアを挙げている。そのうち、新渡戸が

実際に用いた発信方法は、①講演、②英文著書出版、③新聞・雑誌への寄稿、④ラジオ講演、⑤新聞記者会見、⑥テーブル・スピーチなどであった。

新渡戸が実施した広報外交の第２の方法は、「交流」と「協働」である。新渡戸は、「発信」という方法を全面的には評価していなかった。その理由は、「言葉の意味は非常に限られたものだから、一時には一つの事しか表現できない。ところが現実は、全体として立ち現れる。生命も、たえざる流動だから、いと速やかな変化を受ける。そこで今言った言葉も次の瞬間には当てはまらないほどだ。言語表現では不十分な感じがする」[218]からである。また、ある言語を別の言語に翻訳する場合や、外国人が別の国の言語を使用する場合にも、各言語間において意味の相違が生じることにも、言語表現の限界を認識していた[219]。そこで、「発信」の限界に気づいた新渡戸が選んだ方法は、「交流」や「協働」であった。言語情報の流れが一方向である「発信」と比較して、言語情報やそれ以外の非言語情報を双方向でやりとりする「交流」や「協働」のほうが、より多面的に、より重層的に伝え合うことができるからである[220]。具体的には、国際連盟事務次長就任中に、新渡戸は、ジュネーブを訪れた政治家・外交官・学者といった各国各界のキーパーソンを、自宅に招いて個人交流を図った[221]。

また、「協働」は、１つのプロジェクトを複数の人間が一緒に築き上げていく過程で、互いの考えや人間性を理解し合い、関係を深めることで、信頼感を得ることができる。具体的には、国際連盟事務次長就任時代に、新渡戸は、世界各国の教育や科学などの分野の知識人たちと「知的協力国際委員会」を創設して様々な事業を運営した。

以上のように、新渡戸が「交流」や「協働」を重視した理由は、物事の全体像、つまり「真実」をより正確に伝えようとしたからである。また、この点に関連して、先述のとおり、新渡戸は、「事実」にもとづいた「真実」を伝えることを重視した。

新渡戸が実施した広報外交の第３の方法は、「国際貢献」である。新渡戸は、日本が自国の国益を超越して、国際社会のために「（国際）連盟で日本人が真剣に奉仕し貴重な貢献をな」[222]すことによって、日本の地位を高め、日本のイメージアップを図ることができると考えた。つまり、国際社会に貢献することによって、結果的に日本にも貢献できるという発想である。具体的に新渡戸が国際連盟を通して実践したこととしては、①知的協力委員会創設に寄与したこと[223]、②広報担当としてヨーロッパ各国で講演活動を展開し、国際連盟を知らしめたこと[224]、③『国際機関ハンドブック』（Handbook of International Organizations）を出版し、各国の国際機関のネットワークの構築に寄与したこと[225]、④オーランド諸島の領土紛争を解決に導いたこと[226]、⑤新言語であるエスペラント語の普及に尽力したこと[227]、などが挙げられる。

ところで、国際貢献する際に、新渡戸は日本のイメージの向上以外に、別の狙いも持っていたと考えられる。すなわち彼は、平時に日本が５大国の１つとして国際貢献しておけば、万が一戦争という最悪の事態に立ち至った場合に、他の大国が日本を支援してくれると考えた。それは彼が、国際連盟の常任理事国という「この地位は（中略）非常時にはその値打ちははかり知れぬほどだ（中略）。毎年の負担額については、これは〝戦争〟に対する保険措置だと考えねばならず。保険であるからには、直接利益など期待してはいけない」[228]と述べていることからも明らかである。新渡戸は、いわゆる掛け捨てになっても、「非常時にはその値打ちははかり知れぬほど」[229]意味をもつ「保険措置」[230]として国際貢献しておくべきであると考えたのである。

以上にみたとおり、新渡戸の広報外交の方法としては、①発信、②交流・協働、③国際貢献が挙げられる[231]。

(6) 広報外交の目的

新渡戸による広報外交の目的は、3つに大別される。

目的の1つ目は、日本のマイナスの印象を払拭しプラスへ向上させること、つまり日本のイメージアップを図ることであった。日露戦争直後の時期は、『武士道』において、日本人が決して好戦的で野蛮な国民ではなく、礼儀を備えた文明国であるということを理解させることで、イメージアップを図ろうとした[232]。

その後も、対華 21 ヵ条要求、山東問題、シベリア出兵といった行動から、日本が国際社会において「恰も軍国主義の権化、第二の独逸のやうに看做され、国際間の気受けは頗る悪かった」[233] ので、新渡戸はそのマイナスのイメージを払拭し、「(国際) 連盟に集って来る数百千の各国人に日本人の立派な国民性を理解させ印象づけ」[234] ようという目的でイメージアップを図った。

目的の2つ目は、日本が不当な扱いを受けていることを国際社会に知らしめ、改善させることであった。具体的には、アメリカ留学中には、日本がアメリカをはじめ各国と締結させられた修好通商条約の改正を訴える講演を実施した。また、カリフォルニアにおける日本人移民排斥運動の結果として、1924 年にアメリカ排日移民法が成立した時期は、日本人を含めた人種差別の不当性を訴えかけ、この法律の改正につとめた[235]。

目的の3つ目は、日本の活路を拓くための日本の対外政策を容認させることであった。いわゆる戦間期の日本は、①日本国内の人口過剰・周密[236]、②日本人移民に対する欧米諸国からの排斥[237]、③(移民や原材料入手のための) 領土不拡張[238]、④日本国内における原材料の貧困[239]、⑤外国による日本製品に対する高関税[240] といった苦境を抱えていた。それらの諸問題を克服するために、日本が日露戦争以降に賃借していた満蒙の土地 (以下、満州と表記) を活用することによって、日本の活路を拓くことは正当であり、そのための日本の政策を国際社会に認めてもらうことであった。

以上のように、新渡戸による広報外交の目的は、情勢に応じて変化した。

新渡戸の「広報外交」観について、以下にまとめておきたい。彼は、日本が政治・社会・文化・教育・思想などの面で、欧米に劣っていると見なされた結果として不平等条約を結ばされたと、当時の情勢を捉えた。また、世界的な潮流として、各国の国民によって形成される「世論」がその国の政府要人に与える影響が、次第に大きくなる傾向にあると考えた。そこで、新渡戸のような民間人が広報外交のアクターとなって、①英文著書出版や新聞への寄稿などによる「対外発信」、②海外の各界の要人との「個人交流」、③海外の学者や知識層との国際的なプロジェクトの「協働」、④国際連盟事務次長として国際紛争や国際問題を解決することよる「国際貢献」といった方法で、アメリカを中心とした国際社会に対して、日本の苦境や日本の良い面を知らしめることで、国際社会における日本に対する理解をさらに深めるべきであると考え、それを実践した。その目的は、①国際社会における日本のイメージを向上させるため、②日本が受けている不当な状況を改善させるため、③日本の活路を拓く政策を容認してもらうためであった。以上のように新渡戸にとっての「広報外交」とは、日本の活路を拓くための1つの戦略であり、それが彼の「広報外交」観であったといえよう。

さらに、新渡戸の「広報外交」観の特徴について述べる。

新渡戸の「広報外交」観の特徴の１つめは、虚偽性の排除を強く志向していることである。彼は、広報外交を実施する際に、可能な限り虚偽性を排除するために、①情報を双方向にやりとりをする「交流」や「協働」によって、現実をより立体的・多面的に、つまりより正確に、全体像を伝えること、②複数の「事実」の断片を伝えるのではなく、複数の「事実」から導き出された「真実」を伝えること、という方法と取った。そのようにして、彼は、国際社会の世論形成において虚偽性を排除して、より大きな信頼を獲得しようとした。国際社会に虚偽を流布させて自国にとって有利な方向へ自局を動かそうとするやり方は、日本の武士がするべきことではないという、新渡戸の強い意志が感じられる。新渡戸にとって、虚偽は大いに恥ずべきことなのである。

新渡戸の「広報外交」観の特徴の２つめは、世界全体の平和を志向している点である。自国の利益だけを図ろうとするのではなく、国際社会全体の利益を図り、それが世界平和に結びつくことによって、国際社会の世論形成において自国に対する好感度を上げ、結果的に自国の利益にもつながるような広報外交を目指した。新渡戸の最晩年の 1933 年 8 月、第 5 回太平洋問題調査会（IPR）の国際会議（太平洋会議）の開会晩餐会において、新渡戸は日本 IPR 支部代表団の団長として講演を行い、その中で、「この地球上の全世界の人々が親密に接触することにより、いつの日か、ゆっくりとではあっても、激情ではなく理性が、自己の利益ではなく正義が、全世界の民族と国家のための仲介人となる日が来ることを希望するのは、過大な望みというものであろうか？」[241] と述べている。新渡戸が、理性や正義が全世界の人々と国家を結びつけることを願うと主張しているように、彼は日本ただ一国だけでなく世界全体がよくなることを切望しており、その世界平和という発想が、彼の「広報外交」観の根底に存在しているのである。彼の講演の中に「正義」という言葉があるが、これは「国際正義」という意味であり、世界全体の結合、ひいては世界平和を志向するものである。

新渡戸の「広報外交」観には、国際社会の世論形成において、正々堂々と真実を提示することで、恥をかくことなく、また、国際正義にかなったフェアプレーが世界を結びつけるという、武士道の精神が反映されていることが理解できよう。

9. 新渡戸の「広報外交」の現代的意義

明治期から昭和期に至る期間に、広報外交を実施した日本の代表的な人物としては、金子堅太郎（1853～1942）、末松謙澄（1855～1920）、新渡戸稲造、鶴見祐輔（1885～1973）の 4 名が挙げられる。このうち、金子、末松、鶴見の 3 名は、いずれも対外発信を重視する傾向が強かったようである。広報外交において、対外発信にとどまらず、時代を超越した発想を持ち、対外発信以外の活動を実施したのは、新渡戸稲造ただ 1 人であった。彼の時代を超越した発想とは以下の諸点であり、それらに新渡戸の「広報外交」観の現代的な意義があるといえよう。

（1）情報を一方向に「発信」するよりも、双方向のやりとりをする「交流」のほうが、重層的・多面的に伝えられるので、より正確な理解に至ることができるという発想である。この発想は、新渡戸の国際連盟事務次長就任時代に、自宅を交流の場として開放し、政府要人や学術界の要人と個人交流することによって実践された。

(2) 複数の「事実」から導き出された「真実」を交換し合うことで、相互理解に至るという発想である。これは、太平洋問題調査会（IPR）の国際会議（太平洋会議）における一連の活動で実践された。
(3) 世界各国が「国際正義」を共有し、それを培っていくことで、世界全体の結合を深めることができるという発想である。これは、国際連盟における一連の活動で実践された。
(4) 複数の国家の科学者や教育者などの知識層が、1 つのプロジェクトを「協働」することによって、相互に理解を深め合うことができるという発想である。これは、国際連盟において、新渡戸が「知的協力委員会」を創設し、様々なプロジェクトを運営したことによって実践された。
(5) 日本が「国際貢献」することによって、他国から日本に対する共感・信頼感が得られるという発想である。これは、国際連盟において、新渡戸が世界の問題や紛争を解決したことで実践された。

以上の（1）から（5）を俯瞰してみると、「交流」については、金子堅太郎、末松謙澄、鶴見祐輔の 3 名も実施しているが、国際連盟事務次長就任時代に、自宅を社交場のように開放し、政治家・外交官・学者ら各国・各界のキーパーソンを招いて、大々的に個人交流を図ったのは新渡戸だけであった。

また、「国際貢献」についてみると、鶴見は、新渡戸から国際連盟事務次長のポストを引き継ぐように打診された時に断っていることから、国際貢献のポストに就くことの重要性に対する意識は低かったと考えられる。鶴見は、自身の広報外交の活動を、日本国内の政治活動のための副次的なものとして捉えており、日本国内における政治活動のほうをより重視していたのである。

以上（1）から（5）の新渡戸の発想や実践はいずれも、第 2 次世界大戦前のものとしては画期的であったといえる。

おわりに

新渡戸の広報外交の能力の形成期を俯瞰すると、彼は、幼児期に四国艦隊下関砲撃事件など、江戸から明治へと移る時流の大きな変化の影響を受けて、西洋の優越性と脅威を同時に思い知らされた。彼は武士道の精神から、西洋に屈して従うのでもなく、西洋に擦り寄るのでもなく、西洋と対等の立場で付き合うべきだと考えた。そのためには、コミュニケーション力、つまり英語力を磨くことが必要であると痛感し、幼少期より早々に学習を開始した。また、当時の日本はまだ国語教育の制度が整っていなかったこと、英語学習熱が高まりをみせていた時代潮流、新渡戸自身の生来の国語嫌いなどの理由が、彼を英語学習へと向かわせたという一面もあった。国語については、新渡戸が 10 代の時に、読み書きよりも、講談や落語などの演芸に魅せられ、それらを見聞きして学んだことが、後年の講演力（口頭表現の能力）の向上につながったものと思われる。

新渡戸は、札幌農学校時代には、日常会話も授業もすべて英語が用いられるという環境で学び、読書も英文著書を多読した。また、折々英作文を書かされたり、英語で講演させられたりし、さらに、新渡戸の英作文がアメリカの新聞に掲載されるという成功体験を得たことも、彼の対外発信活

動への意欲を高めたと考えられる。

アメリカ留学時代には、アメリカ到着時点ですでにアメリカ人を魅了するだけの英語での講演力を有していた。いくつかの大学において専門科目の学習をする一方で、学資稼ぎのためにアルバイトで新聞の英文編集や英語講演を行った。また、クエーカーの集会に参加したことが契機となり、ボルチモアをはじめ周辺各都市において講演する機会を度々得るようになった。講演内容については、①不平等条約の改正、②日本文化、③少年院における教育的・普遍的な指導など、政治・文化・教育の分野にわたっていた。この時期の講演活動は、結果的に後年の大々的な対外発信につながる演習的な経験となったと考えられる。

また、新渡戸は、アメリカ留学時代とドイツ留学時代に執筆した研究論文のいくつかを著書として自費出版した。研究論文という性質の著書であったので、後年の大衆向けの著書『武士道』のようなベストセラーには至らなかったものの、それらは著書出版による対外発信としての演習的な経験となった。新渡戸は、借金をしてでも自著として出版したいという強い意欲を持っていたことから判断して、作文や論文が雑誌に発表されたり、著書として出版されたりすることに、非常な喜びを覚える体質であったと考えられる。

上述の形成期における研鑽や成果は、①英文著書『武士道』の出版（1900 年）と、②日米交換教授としての講演活動（1911 年）の 2 つの対外発信につながり、さらに晩年に至るまでの継続的な対外発信につながっていった。

新渡戸の「広報外交」観の基底にあるものは、幼少期に培われた「武士道」の精神であった。その武士道の精神の根幹をなすものは、①廉恥心（恥の感覚）と、②正義を重んじる精神であったと考えられる。

廉恥心については、新渡戸は、嘘をついてまで、自国に有利なように自局を運ぼうとするのは、恥ずべきことだと考えた。虚偽の宣伝は、必ず暴露され、虚偽を流した国は、最終的には国際社会で信用されなくなると考えていた。新渡戸の広報外交の根本的な発想は、虚偽報道や捏造報道を避けて、事実にもとづいた真実を伝えることによって、国際社会からの信頼を得るというものであった。

また、正義を重んじる精神については、新渡戸は、国際関係においては自国の利益だけを考えるのではなく、正義の観念に基づいて、公平無私な見地から行動しなければならないと考えていた。さらに、国際社会が世界共通の「国際正義」を培うことが世界平和につながると考えた。

新渡戸の「広報外交」観についてみると、政府要人だけでなく、新渡戸のような民間人が、発信、交流、協働、国際貢献といった複合的な方法で、事実にもとづいた真実を伝えることによって、日本に対する国際世論を向上させ、日本への信頼感を得、日本の活路を拓くことを目指すというものであった。

また、その「広報外交」観の特徴については、①虚偽性の排除を志向していること、②世界全体の平和を志向していることが挙げられる。

新渡戸の広報外交の現代的な意義の中で、新渡戸と同時代の人々が実施した広報外交から飛び抜けて特徴的なことは、国際貢献することによって日本のイメージを向上させた点であった。具体的には、国際連盟事務次長就任時代に、新渡戸が中心となって各国の教育・科学分野の知識層とともに、「知的協力委員会」を創設し、国際的なプロジェクトを協働したことによって国際貢献したこ

とが挙げられる。日本人の新渡戸が国際貢献したことで、日本という国家に対する各国の好感度が向上したことはいうまでもない。「知的協力委員会」は、第 2 次世界大戦後も国際連合にひきつがれ、多様な進展を見せて現代に至っている。

本稿では、新渡戸の広報外交の能力の形成期をたどり、彼の「広報外交」観を分析した。新渡戸は、22 歳の時に、東京大学の担当教諭から将来の展望を問われ、「太平洋の橋になり度と思ひます」と答え、その言葉どおりに、①広報外交の出発点としての『武士道』を出版し、その後、②日米交換教授としての講演活動、④国際連盟の事務次長としての活動、⑤知的協力委員会の創設・運営、⑥太平洋問題調査会における意見交換や講演活動、⑦多数の英文著書の出版などを行った。さらに、新渡戸は、⑧満州事変直後の 1932 年 4 月には渡米して約 1 年間、対日感情が非常に悪化しているアメリカにおいて、日本の立場を訴えかける広報外交を展開した。⑨ 1933 年 2 月に日本が国際連盟から脱退した後の、同年 8 月にはカナダのバンフにおいて開催された第 5 回太平洋会議に出席し、世界各国の不寛容さから生じている経済のブロック化に警鐘を鳴らす講演を行った。そして、その約 1 ヵ月後の 1933 年 9 月に、新渡戸はカナダで倒れて 72 歳で客死した。まさに広報外交を実施しつづけ、「太平洋の橋になり」きった生涯であった。

註

1　「広報外交」は、「Public Diplomacy」の日本語訳である。アメリカの元外交官・タフツ大学フレッチャー法律大学院長のエドムンド・ガリオン（Edmund Gullion：1913～1988）が、1965 年に「政府が自国の政策を外国に伝達する際に重要なことは、相手国の国民と意見、関心、文化を交換して理解すること、それを（中略）政策決定者に伝えてアドバイスすること、それが政策に反映されること、その結果立案された政策に関して相手国に説明し影響を与えること」（http://uscpublicdiplomacy.org/2015 年 9 月 5 日付。）と述べた例が、「広報外交」の定義の嚆矢であるとされている。本稿における「広報外交」の定義は、これによっている。

2　本稿においては、両者の相違について、「広報外交」はそのアクターが明示され、事実に基づいた情報を扱う活動であるのに対して、「宣伝」や「プロパガンダ」はアクターが明示されない匿名性の高い活動であり、新聞買収による情報操作や捏造電報の発信といった虚偽性の高い情報を扱う活動であると捉える。以下を参照のこと。『新渡戸稲造全集』第 22 巻（英文大阪毎日寄稿文）教文館、1969 年、178 頁。（『新渡戸稲造全集』については、以下、「全集 22（英文大阪毎日寄稿文）178 頁。」という形で表記する。）新渡戸稲造『東西相触れて』たちばな出版、2002 年、111 頁。全集 20（編集余録）316 頁、347 頁。

3　全集 6（帰雁の蘆）20 頁。拙著『鶴見祐輔の広報外交：一「自由主義的」保守主義者の活動の特徴とその限界性』早稲田大学出版、2011 年、137 頁。

4　全集 1（解題）411 頁。

5　松隈俊子『新渡戸稲造』みすず書房、1969 年、1 頁。

6　同上書、1-4 頁。

7　同上書、4-5 頁。

8　全集 19（幼き日の思い出）606 頁。

9　同上書、608 頁。

10　全集 6（内観外望）330 頁。

11　新渡戸稲造『世渡りの道』文藝春秋、2015 年、167 頁。

12　同上書、168-170 頁。

13　新渡戸稲造・山本博文訳『現代語訳 武士道』筑摩書房、2010 年、77-78 頁。（以下、「山本訳『武士道』77-78 頁。」と表記する。）（　　）内は、引用者による。
14　全集 19（幼き日の思い出）608 頁。
15　同上書、605 頁。
16　同上。
17　同上。
18　同上。
19　同上書、599-600 頁。
20　同上書、600 頁。
21　同上書、602 頁。
22　同上書、603 頁。
23　全集 6（帰雁の蘆）20 頁。
24　全集 19（幼き日の思い出）613 頁。
25　同上書、614-615 頁。
26　同上書、613 頁。
27　全集別巻 1（小伝）9 頁。
28　全集 19（幼き日の思い出）615 頁。
29　同上書、626 頁。
30　全集 6（内観外望）353 頁。
31　全集 19（幼き日の思い出）626 頁。
32　同上。
33　同上書、631 頁。
34　同上。
35　同上書、649 頁。
36　新渡戸は、「日本では演説の技術などと称するものはわずかに僧侶の説教か、しからばずっと降って講談師あるいは落語家等に存した」（新渡戸「独仏外相の演説ぶり」前掲、新渡戸『東西相触れて』81 頁。）と述べている。
37　全集 19（幼き日の思い出）634-635 頁。
38　同上書、645 頁。
39　同上書、644 頁。
40　アメリカの教育者・マリオン・M・スコット（Marion McCarrell Scott：1843～1922）か。詳細不明。
41　前掲、松隈『新渡戸稲造』46 頁。
42　全集 19（幼き日の思い出）645 頁。
43　同上書、648 頁。
44　同上。
45　同上書、650 頁。
46　同上書、651 頁。
47　同上書、653 頁。
48　同上書、654 頁。
49　同上。
50　同上書、655 頁。

51 同上。
52 同上。
53 前掲、松隈『新渡戸稲造』40 頁。
54 ジョージ・オーシロ『新渡戸稲造：国際主義の開拓者』中央大学出版部、1992 年、16 頁。（以下、「オーシロ『新渡戸稲造』16 頁。」と記す。）
55 全集 21（札幌農学校）366-372 頁。
56 保永貞夫『新渡戸稲造』講談社、1984 年、75 頁。
57 前掲、オーシロ『新渡戸稲造』17 頁。
58 前掲、松隈『新渡戸稲造』31 頁。
59 亀井秀雄『開識社の研究』北大百年史、1982 年、565-579 頁。NHK 取材班『日本人は何を考えてきたのか 大正編：「一等国」日本の岐路』NHK 出版、2012 年、18-19 頁。
60 前掲、オーシロ『新渡戸稲造』18 頁。
61 前掲、松隈『新渡戸稲造』57 頁。
62 全集 19（幼き日の思い出）648 頁。
63 前掲、松隈『新渡戸稲造』80 頁。前掲、オーシロ『新渡戸稲造』18-19 頁。
64 前掲、オーシロ『新渡戸稲造』19 頁。
65 内村鑑三・鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店、1958 年、60 頁。
66 前掲、松隈『新渡戸稲造』93-94 頁。
67 同上書、105 頁。
68 全集別巻 1（旧友新渡戸博士を憶ふ）33 頁。
69 前掲、松隈『新渡戸稲造』110 頁。
70 同上書、113-114 頁。
71 新渡戸稲造『修養』KADOKAWA、2017 年、107-108 頁。
72 全集 22（宮部金吾宛書簡）230-231 頁。
73 全集 6（帰雁の蘆）20 頁。
74 同上。
75 同上書、20-21 頁。
76 前掲、オーシロ『新渡戸稲造』25 頁。
77 全集 6（内観外望）354 頁。
78 新渡戸は、「僕等少年の最大の目的は、一度洋行して後で参議に成のであつた（中略）此志在千里的の空気の中で育った僕だから、年経ても何時か海外に踏出ん考えは抜なかった」（全集 6（帰雁の蘆）19 頁。）と述べている。
79 新渡戸は、「日本の唯一の大学に未だ来て居らんとは、少なく共日本の学界は八年は遅れている」（全集 6（帰雁の蘆）20-21 頁。）と述べている。
80 新渡戸は、「僕は若い頃洋行するのをもって、一世の理想のごとく思い」（前掲、新渡戸『修養』358 頁。）と述べている。
81 新渡戸は、「苟も学に志す以上は、（中略）第一己を磨かざるべからず、それには広い世界に出なければ、唯々遅れるのみと思ひ定めたのが、洋行直接の動機であつた。」（全集 6（帰雁子の蘆）21 頁。）と述べている。
82 前掲、オーシロ『新渡戸稲造』25 頁。
83 全集別巻 1（旧友新渡戸博士を憶ふ）32-33 頁。
84 前掲、新渡戸『修養』358 頁。

85　全集 6（帰雁の蘆）26 頁。
86　同上書、27 頁。
87　全集別巻 1（小伝）15 頁。前掲、松隈『新渡戸稲造』138 頁。
88　全集別巻 1（小伝）15 頁。前掲、松隈『新渡戸稲造』140 頁。前掲、オーシロ『新渡戸稲造』30 頁、32-33 頁。新渡戸は、「米国に居る頃、農政と云ふ学科はなかったから、之に縁の近い経済、歴史、政治学などをやつた。」（全集 6（帰雁の蘆）108 頁。）と述べている。
89　全集別巻 1（小伝）15 頁。
90　前掲、オーシロ『新渡戸稲造』32-33 頁。
91　前掲、松隈『新渡戸稲造』143 頁。
92　全集別巻 1（旧友新渡戸博士を憶ふ）35 頁。
93　全集別巻 1（小伝）15 頁。須知徳平『新渡戸稲造と武士道』青磁社、1984 年、39 頁。
94　前掲、保永『新渡戸稲造』101-102 頁。
95　全集別巻 1（小伝）15 頁。
96　前掲、松隈『新渡戸稲造』146 頁。
97　内村鑑三・鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店、1958 年、60 頁。
98　前掲、松隈『新渡戸稲造』144-145 頁、146 頁。
99　前掲、山本訳『武士道』15 頁。
100　全集 6（帰雁の蘆）138-139 頁。
101　全集 22（解説）652 頁。
102　ジョージ・M・オオシロ「新渡戸稲造とフィラデルフィアのクエーカーたち」佐藤全弘編『現代に生きる新渡戸稲造』教文館、1988 年、218 頁。佐藤全弘『新渡戸稲造の信仰と理想』教文館、1985 年、253 頁。
103　前掲、松隈『新渡戸稲造』143 頁。
104　同上書、146-147 頁。
105　全集 10（人生読本）、276 頁。
106　新渡戸稲造「留学談」『札幌農学校学芸会雑誌』22 号。
107　前掲、佐藤『新渡戸の信仰と理想』253 頁。
108　前掲、新渡戸「留学談」『札幌農学校学芸会雑誌』22 号。
109　新渡戸は、日本文化について講演する際には、日本服の着用を求められたという（前掲、新渡戸「留学談」『札幌農学校学芸会雑誌』22 号。）。
110　前掲、オーシロ「新渡戸稲造とフィラデルフィアのクエーカーたち」218 頁。不平等条約が解消したのは、日本が日清戦争において清国に勝利した後の、1899 年 7 月に日米通商航海条約が発効したことにより失効した時点である。
111　新渡戸は、アメリカの懲治監を視察した際に、監長に求められて、監内の教場で若年者を対象に道徳的な講演を行った。その際、新渡戸は、監長に 14 室の教場を次々と引き回される形で講演をさせられたが、彼は 14 室のそれぞれで講演内容を臨機応変に変えてみせた。聴衆の若者たちが後で講演内容をお互いに語り合うであろうことを想定して、同じ話を 2 度行わなかった（全集 6（帰雁の蘆）64-66 頁。）。新渡戸の講演がいかに即興性に富んだものであり、単に日本人がアメリカ人に発信したという枠を超えて、普遍性のある内容であったかが理解できよう。
112　前掲、松隈『新渡戸稲造』143 頁。
113　同上書、154 頁。
114　全集別巻 1（小伝）15 頁。

115　前掲、松隈『新渡戸稲造』155 頁。
116　全集別巻 1（小伝）15 頁。
117　前掲、オーシロ『新渡戸稲造』37 頁。
118　全集別巻 1（小伝）16 頁。
119　前掲、オーシロ『新渡戸稲造』38 頁。
120　前掲、松隈『新渡戸稲造』163-164 頁。
121　全集 6（帰雁の蘆）109 頁。前掲、松隈『新渡戸稲造』157 頁。
122　全集 22（アダムス宛書簡）333 頁。
123　全集 6（帰雁の蘆）32-33 頁。
124　同上書、33 頁。
125　同上。
126　同上。
127　同上。
128　前掲、オーシロ『新渡戸稲造』38 頁。前掲、松隈『新渡戸稲造』163 頁。
129　前掲、松隈『新渡戸稲造』164 頁。前掲、オーシロ『新渡戸稲造』40-41 頁。
130　前掲、松隈『新渡戸稲造』157-168 頁。前掲、オーシロ『新渡戸稲造』37 頁。このドイツ留学は、北海道庁からの命によって農業経済を習得し、3 年後には札幌農学校で教職に就くという条件が付けられていた。
131　全集 6（帰雁の蘆）64 頁。
132　同上書、70-72 頁。佐藤全弘『新渡戸稲造：生涯と思想』キリスト教図書出版、1980 年、61 頁。
133　全集別巻 1（小伝）17 頁。
134　前掲、オーシロ『新渡戸稲造』42 頁。
135　同上書、40-41 頁。
136　全集 22（訳注）623 頁。
137　本書は、新渡戸の恩師でもあり、当時、科学的歴史研究を唱導・指導していたハーバート・B・アダムス（Herbert B. Adams）を編者とする「John Hopkins University Studies in Historical and Political Science 叢書」の 1 冊として出版された（全集別巻 1（小伝）17 頁。全集 13（解題）551 頁。）。
138　*A Japanese Farrago*, The Saturday Review, 15th October 1904.
139　前掲、松隈『新渡戸稲造』167-168 頁。
140　同上書、168 頁。
141　全集 22（アダムス宛書簡）333 頁。
142　全集 6（帰雁の蘆）169 頁
143　同上書、171 頁。
144　全集別巻 1（小伝）17 頁。前掲、松隈『新渡戸稲造』176 頁。
145　前掲、オオシロ「新渡戸稲造とフィラデルフィアのクエーカーたち」222 頁。
146　全集別巻 1（小伝）18 頁。前掲、松隈『新渡戸稲造』173-175 頁。
147　前掲、松隈『新渡戸稲造』178 頁。
148　全集 3（解説）676 頁。
149　前掲、オオシロ「新渡戸稲造とフィラデルフィアのクエーカーたち」219 頁。
150　全集 6（帰雁の蘆）164 頁。
151　全集別巻 1（小伝）15 頁、18 頁。
152　前掲、松隈『新渡戸稲造』143 頁。

153　前掲、オオシロ「新渡戸稲造とフィラデルィアのクエーカーたち」218 頁。
154　前傾、松隈『新渡戸稲造』146-147 頁。
155　同上。
156　前掲、松隈『新渡戸稲造』178 頁。
157　全集 3（解説）676 頁。
158　前掲、オオシロ「新渡戸稲造とフィラデルフィアのクエーカーたち」219 頁。
159　全集 1（解題）411 頁。
160　全集 6（帰雁の蘆）20 頁。
161　全集 6（内観外望）330 頁。
162　前掲、新渡戸『世渡りの道』167 頁。
163　全集 6（帰雁の蘆）20 頁。
164　同上。
165　前掲、山本訳『武士道』182 頁。
166　同上。
167　前掲、松隈『新渡戸稲造』143 頁。
168　全集 6（帰雁の蘆）175 頁。
169　前掲、山本訳『武士道』182 頁。
170　新渡戸は、「（ある国が）すこぶる下劣なる方法をもつて、日本の不利益なことを世界に宣伝しようとして、却ってそれが暴露して、二進三進も行いかなくなつた。これだけいつたら諸君にも分かると思ふが、さふいふペテンの方法は時に成功するかもしれない。けれどもすぐにわかるものである。近頃はどこの国でも、相当に密偵が行き届いているから、勝手なペテンは食わない。よほど遅れた国のものでなければ、こんなペテンをやりはしない。この点日本は辱かしくない。ペテンじみた、或は宣伝じみたことをしない。そのかわり時勢に遅れることがある。しかし遅れてもそのほうがよい。」(全集 6(内観外望)314 頁。)と述べている。(　　)内は、引用者による。
171　新渡戸は、「思い出す華盛頓会議、またその前の巴里講和会議の時など、支那は殆ど宣伝で持切りだつた。高い金で各国人を雇ひ、裏へ回って宣伝させる。雇われる奴も不見識な奴である。金をもらって支那の提灯を持つ。」（全集 6（内観外望）314 頁。）と述べている。
172　全集 22（英文大阪毎日寄稿文）181 頁。
173　同上。
174　同上。
175　新渡戸は、「ファクトといふのは事実、トルースといふのは真理である。日本語でほんたうといふ言葉は、その何れにも使はれる。『君、時計を持つてゐるか』『持つてゐるよ』『ほんたうか』このほんたうかといふ言葉は、真理かといふ意味ではない。事実かといふことである。（中略）例へば、宗教家が神は存在するといふ。これは事実とはいへない。けれども真理である。」（全集 6（内観外望）360-361 頁。）と述べている。
176　全集 22（英文大阪毎日寄稿文）193 頁。
177　同上。
178　同上。
179　同上。
180　同上。
181　同上。
182　同上。

183　同上書、181 頁。
184　全集 19（日本文化の講義）274-275 頁。
185　全集 22（英文大阪毎日寄稿文）181 頁。
186　同上。
187　拙論「パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造：太平洋問題調査会（IPR）における活動を中心として」『太平洋問題調査会（IPR）とその群像』早稲田大学アジア太平洋研究センター、2016 年、4 頁。
188　新渡戸は、1929 年にアメリカの代表的な新聞記者が来日した際に、「彼らの眼から何一つ隠してはならぬ。われわれをまさに『ありのままに』――偏見も追従もまじえずに――描いてくれるよう彼らに頼むばかりである」（全集 22（英文大阪毎日寄稿文）76 頁。）と述べている。また、「自国の事ながら非は非なりと明らさまに云ふ人が一人でも其国にあれば、反つて其国に対する尊敬が増すのである」（全集 4（米国移民法案修正の報を聞きて）571 頁。）とも述べている。
189　全集 22（英文大阪毎日寄稿文）150-151 頁。
190　前掲、新渡戸『世渡りの道』167 頁。
191　全集 6（内観外望）313 頁。
192　同上。
193　同上書、323 頁。
194　全集 17（日本国民）166 頁。（　　）内は、引用者による。
195　同上。
196　鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007 年、306 頁。
197　同上書、306-307 頁。
198　全集 22（「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文）212 頁。
199　同上。
200　新渡戸稲造『随想録』たちばな出版、2002 年、211 頁。
201　全集 19（日本文化の講義:附録 D「日本人のクェーカー観」）413 頁。416 頁。421-422 頁。425 頁。432-433 頁。
202　新渡戸「国自慢の戒」前掲、新渡戸『随想録』77 頁。（　　）内は、引用者による。
203　新渡戸は、「劣等国と見下されることを容認できない名誉心の感覚、――――それこそがもっとも強い動機であった。」（前掲、山本訳『武士道』182 頁。）と述べている。他にも、以下参照のこと。新渡戸「黄禍とスラヴ禍」前掲、新渡戸『随想録』68-73 頁。新渡戸「東洋の米国主義」前掲、新渡戸『随想録』82-86 頁。
204　全集 6（内観外望）319 頁。
205　前掲、新渡戸『東西相触れて』84 頁。
206　全集 22（英文大阪毎日寄稿文）77-78 頁。（　　）内は、引用者による。
207　同上書、63 頁。
208　新渡戸稲造「米国旅行の印象記」『講演』（214 号）東京講演会、1933 年 4 月、14 頁。
209　全集 6（内観外望）318 頁。
210　前掲、新渡戸「米国旅行の印象記」14-15 頁。
211　全集 6（内観外望）308-309 頁。
212　全集 4（米国の対日態度に就て）468-469 頁。
213　新渡戸稲造「米国研究の急務」『日本人のアメリカ論』研究社出版、1984 年、174 頁。
214　同上書、175 頁。
215　全集 20（編集余録）352-253 頁。（　　）内は、引用者による。
216　同上。（　　）内は、引用者による。

217　全集 22（英文大阪毎日寄稿文）67 頁。

218　全集 20（編集余録）319-320 頁。

219　同上書、644 頁。

220　前掲、拙稿「パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造：太平洋問題調査会における活動を中心として」を参照のこと。

221　アメリカは国際連盟に加盟しなかったが、ジュネーブに来たアメリカ人の大半は新渡戸邸を訪問して交流を深め、「ウィルソンの遺産である連盟で日本人が真剣に奉仕し貴重な貢献をなしつゝあるのを見て驚きもし赤面もした」（全集別巻 1（杉村「連盟時代の先生」）385-386 頁。）という。

222　前掲、鈴木『新渡戸稲造論集』386 頁。

223　全集別巻 1（アヴノル「故新渡戸博士」）382 頁。

224　全集 19（国際連盟の業績と現状）455-486 頁。

225　前掲、オーシロ『新渡戸稲造』177 頁。

226　James Barros, The Aland Question：Its Settlement by the League of Nations, New Heaven, Yale University Press, 1968.「第四節・オーランド島問題」佐藤尚武監修『日本外交史 14・国際連盟における日本』鹿島平和研究所、1972 年、32-43 頁。

227　『ニューヨーク・タイムズ』1921 年 10 月 16 日付。『ザ・ガーディアン』1920 年 8 月 13 日付、1921 年 8 月 10 日付。『ジ・オブザーバー』1920 年 8 月 13 日付、1921 年 8 月 10 日付。全集別巻 2（エスペラントと国際連盟における言語問題）407-441 頁。

228　全集 21（日本における国際連盟運動）502 頁。

229　同上。

230　同上。

231　拙論「パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造：国際連盟における活動を中心として」『渋沢研究』（第 29 号）渋沢研究会、2017 年 1 月。

232　前掲、山本訳『武士道』200 頁。

233　全集別巻 1（杉村「連盟時代の先生」）385 頁。

234　同上。（　　）内は引用者による。

235　全集 14（日本人の特質と外来の影響）593-595 頁。

236　新渡戸稲造「拓殖と日本の進歩」『雄弁』大日本雄弁会、1913 年 8 月、10 頁。全集 22（「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文）214-215 頁。

237　全集 22（「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文）215 頁。

238　新渡戸は、「日本が人口稀薄で未開発の土地を自国の近くに見出し、その土地を開発しようと願うと、全世界が起ち上がって、日本の動きを阻もうとする。」（全集 22（「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文）215 頁。）と述べている。

239　新渡戸は、「わが国の工業進歩を妨げるこの二つの障害にさらに加えて、もっと根本的な地理上の障害がある。それは日本の原料貧困、とくに鉄、金、石油その他、工業国の必要とする多くの物資の貧困のことである。」（全集 22（英文大阪毎日寄稿文）190 頁。）と述べている。

240　新渡戸は、「工業国になろうと熱望するに当たり、日本は高い関税障壁をよじのぼり」（全集 22（英文大阪毎日寄稿文）190 頁。）、「国際連盟が多大の努力を払ってきたにもかかわらず、関税戦争は前よりいっそう荒れ狂っている。障壁は将来ますます高く築かれる見込みである。」（全集 22（英文大阪毎日寄稿文）189 頁。）と述べている。

241　全集 19（日本文化の講義：附録 A Ⅰ）373 頁。

Formation of Nitobe Inazo's view of "Public Diplomacy" and its significance

Kazuma UESHINA

Inazo Nitobe (1862-1933) is known as a liberalist and an internationalist involved in various activities in different fields such as education, colonial policy, religion, agricultural administration, and international relations in the period between World War I and World War II. Among the various activities in which Inazo Nitobe was involved, this paper focuses on " Public Diplomacy."

Nitobe was born in a samurai family in the Tohoku region in the late Edo period, and after studying at three English schools in Tokyo, he studied at Sapporo Agricultural College and the University of Tokyo. However, dissatisfied with studying at the University of Tokyo, he went to the United States to study at Allegheny College and Johns Hopkins University. After that, he moved to Germany, studied at the University of Bonn, the University of Berlin, and the University of Halle, before returning back to Japan.

In this article, I analyze the "formation period" of Nitobe's Public Diplomacy capabilities and basic experience. Specifically, by considering Nitobe's words and actions, I will clarify the following points.

(1) How his familial background shaped his skills?

(2) What kind of educational process did he go through?

(3) How did he improve his Public Diplomacy abilities?

(4) What forms the basis of his view of Public Diplomacy?

(5) How did he think Public Diplomacy should be done?

(6) What is the modern significance of his Public Diplomacy?

After going through the "formation period" of Public Diplomacy as described above, Nitobe published an English book called "Bushido". "Bushido" became a global bestseller and provided an opportunity for Japan to resolve the misunderstandings it received in the international community. In short, "Bushido" was the first success of Nitobe's Public Diplomacy.

Keyword

Public Diplomacy, Public relations activities for overseas, Inazo Nitobe, “Bushido”, Interwar period